

Title	地域づくりにおける「ばか者」への変容プロセス - ホストタウンの取組を事例として -
Author(s)	安藤, 良将
Citation	
Issue Date	2025-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/19757
Rights	
Description	Supervisor: 敷田 麻実, 先端科学技術研究科, 修士 (知識科学)

修士論文

地域づくりにおける「ばか者」への変容プロセス
——ホストタウンの取組を事例として——

安藤 良将

主指導教員 敷田 麻実

北陸先端科学技術大学院大学
先端科学技術専攻
(知識科学)

令和7年3月

Abstract

The Process of the Transformation for ‘Baka- mono (fool)’ in Community Revitalization —A Case Study of Host Town Initiative—

ANDO Ryosuke

School of Knowledge Science,
Japan Advanced Institute of Science and Technology
March 2025

Keywords: baka- mono, fool, crazy, ambiguity, Community Revitalization, Host Town Initiative, Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games, innovator, social innovator

It has been said that there are three key elements to successful community development: outsiders, young people, and fools. In particular, it is often pointed out that there have been 'foolish people' who have acted recklessly. There are high expectations of 'foolish people' as people who will take the initiative in innovative community development.

However, there is no evidence that research has progressed to date because of the negative connotations of the term 'foolish people'. Therefore, the aim of this research is to clarify the existence of 'foolish people' in community development and the process of their transformation.

To achieve this aim, interviews with 10 local government officials who have taken on new challenges in the 'Host Town Initiative' implemented in conjunction with the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games have been conducted. Additionally, the study explores the etymology, historical context, and usage of the Japanese term *baka-mono* (meaning 'foolish people') through document analysis.

As a result, this research clarified the existence and transformation process of *baka-mono* in community development, which is significant as it enables us to consider mechanisms for revitalizing regional development.

目次

第1章 序論	3
1.1 研究の目的	3
1.2 用語の定義	4
1.2.1 ばか者	4
1.2.2 地域づくり	4
1.2.3 イノベーション	5
1.2.4 地域	6
第2章 研究の背景	7
2.1 社会的背景	7
2.1.1 社会の中のばか者の存在	7
2.2 学術的背景	10
2.2.1 イノベーター研究	10
2.2.2 地域づくりの主体の研究	13
第3章 研究の方法	15
3.1 調査方法	15
3.1.1 ばかの語源と使われ方の歴史的経緯の調査	15
3.1.2 インタビュー調査	15
3.2 ホストタウンの取組の概要	18
第4章 分析結果	21
4.1 「ばか」の語源と使われ方の歴史的経緯	21
4.2 インタビュー結果の分析	23
4.2.1 A (40代、課長補佐、東北、相手国：アフリカ)	23
4.2.2 B (50代、課長、東北、相手国：ヨーロッパ)	25
4.2.3 C (50代、主査、東北、相手国：ヨーロッパ)	28
4.2.4 D (40代、係長、東北、相手国：アフリカ)	30
4.2.5 E (60代、主事、関東、相手国：ヨーロッパ)	32
4.2.6 F (50代、室長、関東、相手国：アフリカ)	34
4.2.7 G (50代、課長、北陸、相手国：ヨーロッパ)	36
4.2.8 H (40代、主任、中国、相手国：中米)	38
4.2.9 I (50代、主査、九州)	40
4.2.10 J (50代、課長、九州、相手国：太平洋)	42

4.3 小括.....	44
4.3.1 ホストタウン担当以前の経験.....	44
4.3.2 ホストタウンに何を感じたか.....	44
4.3.3 ホストタウンの取組に感じた不安	45
4.3.4 行政経験の活用や逸脱.....	46
4.3.5 ホストタウンの効果	47
第5章 考察.....	48
5.1 「ばか者」の特性を持つ者.....	48
5.2 行政組織の一員としての立場	48
5.3 両義性と斜めからの目線.....	49
5.4 「ばか者」への変容プロセス	51
5.4.1 両義性の表れ	51
5.4.2 両義性の作用	52
5.5 「ばか者」への変容プロセス	53
5.6 結論.....	54
5.6.1 よそ者、ばか者、若者.....	54
5.6.2 現代の「ばか者」像	54
5.6.3 愚行権	55
5.7 本研究の限界と今後の展望.....	55
謝辞.....	57
参考・引用文献.....	58

第1章 序論

1.1 研究の目的

これまで、国内において「地域づくりの現場では、半ば信仰のように『よそ者・ばか者・若者』という3者の役割が強調」されてきた(敷田 2009:85)。それは成功した地域づくりにはこの3者の立役者がいるという、いわば地域づくりにおける根拠のない「物語」である。しかし成功裏に終わった地域づくりでは、この3者の関与、特に無謀な行動をする「ばか者」がいたことをよく見聞する。また、地域では自ら革新的な地域づくりに取り組むばか者が生まれることへの期待は大きい。

そこで本研究では、地域づくりにおける「ばか者」への変容プロセスについて、「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会(以下「2020年東京大会」という。)」の開催に伴って取り組まれた「ホストタウン」の事例を用いて明らかにすることを目的とした。

主にホストタウンに取り組んだのは、自治体の公務員である。公務員は一般に縦割体制、前例踏襲主義、責任回避体質というイメージがある(戸梶,2017:41-42)。しかし、ホストタウンでは、このイメージを打ち破って新しい取組を推進した自治体が存在した。例えば、2019年に、宮城県加美町は、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町に代わりチリのホストタウンになり、同国パラリンピック選手を南三陸町に招致した¹。震災から9年経過したが、未だ震災の爪痕が深く残る被災地の願いを叶えるため、他の自治体の担当者が並々ならぬ努力をした。このような事例が各地で見受けられたのがホストタウンの取組である。

このように、これまで辺縁的存在であった地域関係者が、地域づくりとは関係が薄い2020年東京大会というイベントを通じて「ばか者」に変容し、地域づくりに自ら取り組むプロセスを明らかにすることは、敷田(2009)が考察した地域づくりにおけるよそ者の役割と同様、地域づくりを活性化させる仕組みを考察でき、意義がある。

なお、先行研究によって地域づくりにおける「若者」と「よそ者」の役割や効果については言及されてきたが、「ばか者」については、この語の持つ否定的な意味から研究が進展してきた形跡はない。そのため、これまで先行研究で明らかにされていなかった「ばか者」への変容プロセスと役割を明らかにすることが必要である。

本研究ではまず、第2章で、社会において「ばか者」という語意がどのように使われているのかを概観する。次に、イノベーターおよび地域づくりの主体に関する先行研究のレビューを行う。第3章では、「ばか」の語源と使われ方の歴史的経緯の分析方法を述べるとともに、2020年東京大会当時の自治体のホストタウン担当者10名へのインタビュー調査の方

¹ 時事通信 HP https://www.jiji.com/jc/tokushu?id=article_20190904tohoku&g=tokyo2020_hosttown 2025年1月14日確認

法を述べる。さらに、ホストタウンの取組の概要を述べる。第4章では、「ばか」の語源と使われ方に関する歴史的経緯を述べる。また、インタビュー調査の分析を行う。第5章では、第4章の分析から導出される考察を行う。

1.2 用語の定義

1.2.1 ばか者

広辞苑²によれば、「ばか」のもつ一般的な語意は、「①愚かなこと。社会的常識に欠けていること。また、その人。愚。愚人、②取るに足らないつまらないこと。無益なこと。また、とんでもないこと、③役に立たないこと。」となっている。

本研究で扱うばか者は、上記①～③の意味を含めて持つ者を指すと考えられる。そこには知恵や思慮が欠如している状態を指す①「愚かなこと」と認識されたり、②「無益なこと」や、③「役に立たないこと」とあきれられたり、さらに、②の「とんでもないこと」に含まれる超越的な行動をとることを含んでいる。ばか者は、一見すると無謀な行動をするが、その行動には一貫性があることが多く、彼らにとっては問題意識等に由来する行動など何らかの合理的な理由があると考えられる。

また、①「社会常識に欠けていること」については、社会常識を、彼らが所属している組織の「常識」と捉えれば、彼らはその組織常識を超え、期待以上の成果をあげたことから、社会常識に欠けているという意味は含有していると考えられる。さらに、彼らは自分自身を無意識に制限している自己の常識からも自由になったと言える。ばか者が礼賛されるケースでは、こうした超越が思わぬ成果をもたらしたことが指摘されている（例えば、生田（2019）、木下（2022）³など）。

以上より、本研究における「ばか者⁴」とは「一見無謀な言動をとり、地域、組織を含む社会の常識および慣習等を超越し、人びとの想定外の成果を上げる者」と定義する。

1.2.2 地域づくり

小田切（2018: 496-498）によれば、1990年代後半より「地域づくり」という表現が市民権を得たとされている。さらに、小田切はこの語の含意として3点あると述べている。それ

² 新村出編（2018）『広辞苑 第7版』岩波書店

³ 木下（2022: 5）は自らを「うつけもの」と称している。「うつけもの」は「おろか者」の意である（『広辞苑 第七版』）。

⁴ 本研究では、「愚か」、「無益」、「役に立たない」など、「ばか」がネガティブな語意を表す場合には、「ネガティブなばか」と呼び、上記に定義した「ばか」と区別して使用することとする。また、「ばか」は①のとおり、性質だけではなく、その行為客体も含んだ語意となっているので、本研究においては「ばか」と「ばか者」は同義として扱う。

は第1に、バブル期における大規模リゾート開発の批判から地域住民が自ら立ち上がる「内発性」の強調、第2に、経済的な活況だけではなく文化、福祉、景観等も含めた「多様性・総合性」の担保、第3に、地域における意思決定の仕組みなど社会的なシステムを地域が自ら創造する「革新性」である。このことから、地域全体を内発的に新たにしていくことが地域づくりだと考えられる。一方で敷田（2012: 24 注釈）は、地域づくりの類義語である「地域活性化」、「地域再生」、「地域振興」などを総称して「地域づくり」だとし、それを「アクターが望ましいと思う地域の状態を実現するために、地域課題を解決するプロセス」と定義した。

小田切が述べた3要素に加え、敷田が述べる「地域の関係者が思い描く地域のあり方」が地域づくりの根幹には欠かせないと思われる。そこで本研究では、敷田（2012）の定義を元に、地域づくりは「地域の住民が望ましいと思う地域の状況を実現するために、内発的に革新性をもって地域課題を解決していくプロセス」とした。

1.2.3 イノベーション

イノベーションという概念を提示したのはシュンペーター（1977: 182）であり、経済発展に特有な現象が成立するためには、物、力、知識、資源などを組み合わせた「新結合（neue Kombination：独語）」が非連続に現れる必要があると主張した。さらに、新結合が「産業上の突然変異で経済構造に絶えず内部から革命が起き、古い構造が絶えず破壊され、新しい構造が絶えず生み出され」ることを「創造的破壊」と呼んだ（シュンペーター 1942=2016: 211-212）。また、清水（2019: 36）はイノベーションは「経済的な価値を生み出す新しいモノゴト」だとし、経済効果と新規性に重点を置いた定義をしている。

このように、イノベーションは経済成長を達成するために新しい経済価値を生み出すものとして捉えられる。一方、ロジャーズ（2007: 16）は、イノベーションを「個人あるいは他の採用単位によって新しいと知覚されたアイデア、習慣、あるいは対象物」とした。新規性は当該イノベーション採用者による相対的なものであり、必ずしも世界初というような絶対的な新規性が求められているわけではないとしたことが特徴である。さらにドラッカー（2007: 8-15）は、イノベーションは技術革新に限定されるものではなく、割賦弁済のような経済システム、新聞や保険などのメディアやサービス、さらに公的機関のサービスも含まれるとし、「技術というより経済や社会に関わる用語」とした。

以上を踏まえ本研究では、イノベーションとは「新しいものやことを生み出すために意識的かつ組織的に変化を生み出すこと」と定義した。なお、イノベーションの新たな経済的価値を創出する側面だけに焦点を当てず、社会的価値を生み出すことも前提とした。

1.2.4 地域

宮口（2007）は、地域の地理学の定義として、基本的に、均等地域または等質地域、機能地域の 2 つのとらえ方があるとする。前者は、同じ要素または状況が空間的に連続しており、他とは区別されている広がりである。例えば、森林が連続している地域を森林地域として平野と区別することなどが考えられる。これに対し、後者は、「法制度に基づく機能的作用が及ぶ範囲として他から区別される地域」（宮口,2007：4）である。森林であれば、森林法に定められる「国有林」⁵などがそれにあたる。都道府県などの行政区分も、地方自治法に規定がある機能地域である。

敷田（2009：81 注釈）は、地域の定義を「一定の地理的範囲とそこに住む住民やその関係性」とした。これは社会学でいう「地域社会」とほぼ同義であり、地域は多義性をもっており、画一的にどこまでがひとつの地域だということを決められないため、「一定」と表したものである。

ホストタウンは、自治体という機能地域が基準となって登録されており、取組の物理的範囲も自治体単位となる。自治体という空間の中で、自治体の職員や住民が様々な取組を進めていった。このことを踏まえ本研究では、地域とは「自治体という行政区分の範囲とそこに住む住民やその関係性」とする。

⁵ 森林法第 2 条第 3 項 <https://laws.e-gov.go.jp/law/326AC1000000249> 2025 年 1 月 13 日確認

第2章 研究の背景

2.1 社会的背景

2.1.1 社会の中のばか者の存在

社会ではさまざまなコンテキストの下で、「ばか者」あるいは単に「ばか」というワードが多く使用されている。その多くは「愚かなこと」というネガティブな語意を意図し用いられているが、単に「愚か」というだけでは説明のつかない用例も存在する。

例えば、1988年に第1作が封切りされた映画『釣りバカ日誌』⁶では、主人公が無類の釣り好きであり、釣りを何事よりも優先してしまう様子を「釣りバカ」と形容している。劇中の主人公「ハマちゃん」の振る舞いから、彼は仕事に熱心ではないが、能力的に劣っていないことがわかる。また文学の世界では、『イワンのばか』（トルストイ,2000）をあげることができる。登場人物のイワンは実直な人柄であるが、働くことだけしか取り柄がない。彼はそのことを揶揄されてばかと呼ばれている。しかし物語の中では、イワンは兄弟の窮地を救うとともに、最後は悪魔の親方を打ち負かす。この点でイワンはばかではなく、むしろ立役者である。

一方、日常生活では子煩悩な人のことを「親ばか」、同様に孫を溺愛する人を「孫ばか」と呼ぶ。もちろん、そのように呼ばれている人々の能力が劣るわけではなく、子や孫への盲目的愛情の発露を何かに夢中になっているのでばかと表現しているだけである。また日常の祭りにも「ばか」が登場する。エイプリルフール（4月1日）にちなんで、1956年に始まった「赤羽馬鹿祭り」は、「馬鹿」という言葉が与えるネガティブな印象に配慮し、一時期名称を変更した。しかし、2012年に「再び原点に立ち返るため」として名称を元に戻している⁷。

次に学術の世界では、生田（2019）は自らを「バカ」と称するとともに、東京大学のゼミで「バカゼミ」を主催している。奇想天外な発想の研究を行い、その成果をユーモアを交えて発表することで笑いをとる。一番笑われた研究が高い評価を受ける。この体験をすることで発想が逸脱することに恐怖を感じなくなり、イメージーションを膨らませることができるので、思考の跳躍が求められる研究のための訓練になるという。さらに生田（2019:117）は、ロボット工学と医療を結びつけた自身の経験をもとに、「バカとは『新しいジャンルをつくる人』のこと」としている。

このように、ネガティブな意味でばかを用いていない用例には、その考えや振る舞いが他者の同意や理解を得られなくても、自分の思うことを実行することが含意されている。ま

⁶ 松竹公式サイト <https://www.cinemaclassics.jp/tsuribaka-movie/>（2024年12月18日確認）

⁷ 『赤羽馬鹿祭り』昔の名で再出発 28日から開催 東京『朝日新聞』（2012年4月20日）
<https://www.asahi.com/national/intro/TKY201204190767.html>（2024年12月21日確認）

た、一見するとネガティブなばかりに見える考えや振る舞いは自分には決してまねることはできないが、自由な意思表示へのある種の憧憬がばかと呼ぶ側にも認められる。この点が顕著なのがイノベーションと地域づくりにおける「ばか者」である。

(1) イノベーションにおける「ばか者」

Apple Inc の共同創業者の一人であるスティーブ＝ジョブズは、スタンフォード大学における講演⁸の中で、人並みの人生街道 (the well-worth path) から外れることになろうとも、自分の心に従い、ハングリー・愚か者であり続ける (stay hungry, stay foolish) と説いた。また、ロボットベンチャーを Google に売却し、さらに AI を用いた水道管検査ベンチャーの2社目の売却にも成功した加藤崇は「ここシリコンバレーでは、『クレイジー』というのは褒め言葉以外の何物でもない」(加藤,2019: 195) と述べ、「クレイジー」であるということは、社会常識に囚われず、自由に物事を考え実行することだとしている。さらに、バンングラデシュのグラミン銀行創設者であり、2006 年ノーベル平和賞受賞者のムハマド＝ユヌスは、自分を含めたソーシャル・イノベーターたちのことを「70%クレイジー」だと述べている(エルキントン・ハーティガン,2008: 27)。このように、イノベーターには、自らを「クレイジー」⁹や「愚か者」と位置付ける人たちが少なからず存在する。

また、タルマン (2020: 41) は、ばかの中にもクリエイティブな天才がいることを指摘する。敷かれたレールからはずれて新たな道を切り開き、新しい何かを発見するばかな行動の多くは独創的でもある。このため、天才的にクリエイティブな人たちの行動や思考は常人には理解しにくい。そのため「バカと天才は紙一重」としばしば言われる。

以上のように、イノベーションを起こす人、すなわちイノベーターは、これまで前例のないものを創造するために、既成概念や社会常識にとらわれず、自由に物事を考え、誰も歩いたことがない道を切り開いていくことになる。それはシリング (2018: 19) が述べたように「彼らがみな障害を乗り越える自分の能力に高い信頼を置いているからで、そのために一般人なら決まったものとして受け入れるルールを容認しない」からである。その結果、合意形成の積み重ねによって決定された社会的ルールや、エビデンスに基づき精緻に証明された科学的知見を軽視するイノベーターたちの姿勢は、社会の安定を是とする一般の人々からすれば突飛な行為に写り、能力が劣っているからそうしていると受け止められている。イノベーター自身もそれを理解しており、他者からの侮蔑の「まなざし」を理解したうえで、

⁸ スティーブ＝ジョブズ (2005) 『Stay Hungry, Stay Foolish 伝説のスタンフォード大学スピーチ』, CNN English Express, <https://ee.asahipress.com/download/2004/pdf/2004%20jobs.pdf> 2024年8月16日確認

⁹ クレイジー (crazy) の同義語は、ばか (stupid) または非常識 (not reasonable) であり、本研究では「ばか」、「ばか者」と同義として扱う。同義語は Cambridge Dictionary を参照した。

<https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/crazy> 2024年12月22日確認

「ばか者」を自称するのではないか。

ところで、イノベーターが「ばか者」であるかどうか検証するため手段の1つとして、イノベーションの遂行という困難に見合うだけの経済的対価が得られているかどうかを考えられる。清水 (2022) は、企業等に従業員として雇用されて得られる所得と、起業して自らビジネスを始めて得られる所得を比較し、前者の方が高ければ、起業家はあえて儲からない方を選んでいたので「クレイジー」であると言えるのではないかと述べている。Buenstorf et al. (2017) のデンマークにおける調査で、大学を卒業して就職した者と、大学を途中で退学して自ら起業した者の所得を比較したところ、平均的には大学を卒業したの方が所得が高いことが判明した。また Åstebro et al. (2013) がスウェーデンで行った調査では、大学の研究者が起業した場合と、そのまま大学に残った場合との総収入を比較したところ、平均では起業した場合の総収入の方が若干高いことが判明した。しかし、起業前に比べて起業後は所得の標準偏差が3倍以上あり高いリスクを負う。両方の調査結果とも、起業家の経済的なリターンは期待ほど高くなく、起業家は自らの事業利益獲得に楽観的であり、過剰な期待を持っている可能性があるからこそ、(良い意味で)クレイジーだといわれると清水 (2022: 214) は結論づけている。

(2) 地域づくりにおける「ばか者」

第1章1.1でも述べたとおり、地域づくりには「よそ者、ばか者、若者」の存在が欠かせないと繰り返し言及されてきた¹⁰。「よそ者」は、敷田 (2009) 等の先行研究の積み重ねによって、地域づくりによそ者が寄与できる要因など、その実態やメカニズムが次第に明らかになってきた。また「若者」については、経験の浅さを逆手に取り、新鮮な眼差しで物事を再発見できる可能性があることや、若さゆえの行動力や情熱が期待されるなど、効果は当然だとして疑念を持たれることが少なく、これまで研究対象になりにくかったと推察される。

では「地域づくりにおけるばか者」とはどのような存在なのか。和歌山大学の湯崎(2016)は新聞記事の中で「ばか者」について、地域を良くしたいと願う人が寝食を忘れて地域づくりに没頭し続ける様子だと表現している。該当部分を以下に示す。

「全国でまちづくりやむらづくりが盛んになった90年代の終わり頃から、活性化の先進地とされる地域には、行政などからの視察バスが連なりました。当時、そうした先進地には必ず1人の立役者がいました。

農協や役場の職員、農家、旅館経営者などが『このままじゃいかん』と猛勉強し、取引

¹⁰ いつから言われ始めたのか定かではないが、「2000年代の初め頃には、『よそ者・わか者・ばか者』という言葉がすでに広く知られていたといえる」という説もある (西原 2024: 146)

先開拓に奔走し、時にはダメされたりしながらも売り上げを伸ばしていく。古い体質の地域の中で「ばか者、変わり者」と呼ばれても泥臭く一途に地域を変えていく。」

一方「ないものはない」をキャチフレーズに、条件不利地の離島で地域づくりに取り組む島根県海士町では、新たな産業創出に「よそ者、若者、ばか者」の視点とアイデアを活用している。同町の特産品である岩牡蠣の成功の理由は「水産業とは全く縁のない人物が挑戦し、しかも既成概念を取っ払ったところに成功の秘訣がある」とし、「よそ者（挑戦者）と若者（後継漁師）、バカ者（のぼせ漁師）の典型的な組み合わせが功を奏した」としている（海士町,2018：4）。なお島根県には「のぼせ者（もん）」という方言があり、「一切を顧みず、一つのことに打ち込む人間のこと」と指すとされる¹¹。海士町の「のぼせ漁師」は「ばか者」であると同時に「のぼせ者」でもある。また、海士町前町長の山内（2007：150）は、向こう見ずで調子に乗ってしまう「ばか者」がエネルギーを持って町を動かすと述べている。

吉本興業は2011年に「あなたの街に住みます芸人」プロジェクトをスタートさせた。芸人と吉本興業の社員が地域に住み込み、地域に密着した様々な活動や事業の立ち上げを通じて、地域を元気にするというコンセプト¹²である。西原（2024）は、「住みます芸人プロジェクト」が成功する要因として、住みます芸人や吉本の社員の役割が、よそ者、若者に加え、「世間一般の常識とは異なる価値観や考え方をもち、既成概念にとらわれない思考や行動ができる」（西原,2024：144）ばか者として機能しているという仮説を提唱している。芸人は笑いによって人のポジティブな感情を引き出す。笑いは、ある出来事が予想外の驚きをもたらした際、自分の予想との不一致の原因が判明した時に引き起こされる（Moran et al., 2003）。この点を踏まえれば、人を笑わせることを生業とする芸人は、本質的に既成概念や社会常識に囚われない発想に長けており、「ばか者」と言えるだろう。

2.2 学術的背景

2.2.1 イノベーター研究

イノベーションの定義については第1章1.2.3で述べた。ここでは、イノベーションを起こす者がどのような者なのか先行研究を基に概観する。

彼らは、第2章2.1.1(1)で示したとおり「ばか者」と呼ばれることが多い。彼らは、一般

¹¹ 「コーヒー『のぼせ者』の味」『日本経済新聞』（2018年4月25日）

<https://www.nikkei.com/article/DGXXKZO29774380U8A420C1BC8000/> 2024年12月23日確認

¹² 吉本興業HP <https://www.yoshimoto.co.jp/business/> 2024年12月24日確認

にイノベーターやアントレプレナー¹³と呼ばれている。シュンペーター（1977：207）は、イノベーション、すなわち経済発展のための「新結合」（第1章 1.2.3 参照）の遂行は「アントレプレナー」（Entrepreneur：仏語）によって担われると主張した。さらに、シュンペーター（1977：220-230）は、アントレプレナーとは、①真相を見る意思と能力を有し、率先して進むことができ、②社会の様々な慣行や、種々の不確実性を「できない」という理由にせず、③新しい可能性を発見・創造する者を指導し、実現する者であると定義した。また、彼らをイノベーションに向かわせる動機を、自己の王朝を建設しようとする夢想や意志、闘争意欲、困難を乗り越えての創造の喜び、に求めた。

シュンペーターの描いたイノベーター像は、社会の「慣行」から外れるためには、不確実性を苦にしない精神的自由さを持つ存在であるとともに、指導的地位に就く能力を有した卓越した個人である。

ロジャーズ（2007：232）は、ある新しいアイデアを、社会システムに属する他の成員に先駆けて最初に採用する者のことをイノベーターとだと述べている。イノベーターは冒険的であり、コスモポリイト¹⁴な性質を有する。さらに、複雑な技術知識を理解し活用することができ、高度な不確実性にも対応できる。また、ロジャーズ（2007：243-244）は、ジンメルが提唱する「よそ者」とイノベーターとの類似性を指摘している。よそ者は、社会集団の常識の制約を受けることがないため、新しいものごとに先入観がない。また、外部志向のため情報の入手先が幅広い。これに対し、イノベーターは地域システムの制限を受けず、イノベーションの試行をいとわない自由な性質が備わっている存在である。

なお、イノベーターはあくまでも地域社会の成員であり、よそ者ではないことを踏まえれば、敷田（2009：93）が示す、地域にいながら他者の視点を持てる「地域内よそ者」に近い存在と言える。

またロジャーズ（2007：241）は、イノベーターの動機は金銭だけはすべて説明できないとして、農業分野のイノベーターは裕福なことも多いが、イノベーターではない裕福な農家もたくさんいると指摘し、より多くの金銭を得るための手段としてのイノベーションに疑問を示した。

フロリダ（2013）は、イノベーションの担い手として「クリエイティブ・クラス」の存在を指摘した。科学者、エンジニア、芸術家、文化創造者、経営者、専門家、技能者¹⁵がクリエイティブ・クラスに該当し、世界39カ国に1億～1億5000万人存在しているとする（フ

¹³ アントレプレナー（Entrepreneur）は「企業者」、「企業家」、「起業家」など、訳者によって多様な訳出が見受けられるが、本稿では「アントレプレナー」で統一する。

¹⁴ 外部の社会システムを志向すること（ロジャーズ,2007：243）

¹⁵ 狭義の定義の場合には技能者は含まれない。国によって技能者の定義にばらつきがあるからだとする（フロリダ,2013：188）

ロリダ,2013:188-189)。少数に限られた人だけが新しいものごとを創造する才能を有するというエリート主義を批判し、すべての人がクリエイティビティを有し新しいものごとを創り出すことができるとし、経済成長のエンジンを一般の人々まで拡張する可能性を示した。さらに、クリエイティブな人々は、金銭的な外発的動機に基づき行動するのではなく、給料が下がったとしても刺激的で創造性の高い仕事に参加したいという内発的動機を有している（フロリダ,2013:44-45, 57, 116）。

また、フロリダ（2013:57, 60）は、いわゆる「ブルシットジョブ¹⁶」の存続を否定し、各人が様々な職業分野でクリエイティビティを発揮することにより、お互いに補完・共生するようなエコシステムを構築することが可能となり、経済発展を持続させることができると指摘し、イノベーションの特別性・希少性を否定し、誰でもイノベーターになれる可能性を示唆した。これは、今まで限定された一握りの「天才」というイノベーター像を否定し、能力やスキルがあれば誰でもイノベーターになり、創造的な仕事を行う可能性を示唆したものと言える。

第2章2.2.1において、2つの研究事例から、経済的利益があまり期待できない現実の中で、イノベーターは、経済利益の獲得に過剰な期待を有しており、同時に楽観的なのでクレイジーである可能性を示唆した。しかし、ロジャーズは儲かるからイノベーターになるという可能性は低いことを示唆した。さらに、フロリダも、そもそも金銭的な外発的動機はイノベーターにとって必須ではないとしている。では経済的利益の追求だけを目的としていないイノベーターとはどのような存在なのか。また、何を達成することを目的としているのか。

この点について、Martin and Osberg（2004:39）は、無視され、疎外され、苦しんでいる人々に対し、直接行動、創造性、勇気、不屈の精神を発揮し、そのような人々や社会全体に恒久的な利益と新たな均衡をもたらす者が存在し、彼らは社会的価値の創造をめざすソーシャル・イノベーターだとした。さらに、イノベーターとソーシャル・イノベーターの違いとして、前者は、当初から個人的に経済的利益を得ることが期待されているが、後者は、出資者や自己のために金銭的利益を生み出すことが目的ではなく、社会を変革するような社会的利益の創出を目的としていると主張している（Martin and Osberg,2004:34）。

一方、野中ほか（2014）は、社会的利益を地域や組織の生活の質を向上させる「公共善（Common Good）」と捉える。野中らは、社会変革のプロセスに知識創造論を応用する。まず、人々が暗黙知的に地理的、歴史的、文化的なアイデンティティを共有している範囲を地域とし、地域のステークホルダーが地域の知識を共有するとともに新たな知識を共創する。

¹⁶ グレーバー（2020:27）は、「被雇用者本人でさえ、その存在を正当化しがたいほど、完全に無意味で、不必要で、有害でもある有償の雇用の形態である。とはいえ、その雇用条件の一環として、本人はそうではないと取り繕わなければならないように感じている」と定義している。

それにより新たな価値が生成されていく。その過程で社会的矛盾や制約を乗り越え、プロセスを推進するのが実践知リーダー、すなわちソーシャル・イノベーターである。

シュンペーターが定義した初期のイノベーターは、能力的に卓越した個人が英雄的な行為によって大きな経済的価値の創出を行うものだった。その後、イノベーションの研究が進み、それを実践するイノベーターも、よりリアルなイメージが積み重ねられた。さらに、Martin and Osberg によって、これまでのイノベーター像とは異なる経済的利益よりも社会的利益や変革の追求を重視するソーシャル・イノベーターの存在が指摘された。野中らは社会変革の担い手の重要な役割として実践知リーダーの存在を指摘した。

ソーシャル・イノベーターは社会利益を追求する新しいタイプのイノベーターであるが、多種多様な地域の実情がある中で、社会的価値の創出のあり方も一様ではない。例えば、社会問題は、不法投棄、特殊詐欺、就職氷河期、子供の貧困、性の多様性など様々に存在する。それらの問題は内容が非常に多岐に渡っていることに加え、問題の深淺、関与する者の多少、問題が所在する地域の広狭、そもそも国内にとどまるのか、移民問題のように国際的な対応も必要になる問題なのか、など問題を規定する尺度も多様であろう。そのような多様なケースに応じたソーシャル・イノベーターのあり方を論ずる研究は、例えばU・I・J ターン者の「よそ者」を、疲弊した農村システムを変革する可能性をもつソーシャル・イノベーターとして論じた大石（2020）などが見当たるが、未だ限られたものしかないと言える。

2.2.2 地域づくりの主体の研究

地域および地域づくりについては第1章 1.2.2 および 1.2.4 で述べた。ここでは、地域づくりを行う主体となる人について先行研究を基に概観する。

第1章 1.2.2 で述べたとおり、地域づくりという語が市民権を得たのは1990年代とされている。その頃、同時に地域づくりに熱心に取り組む地域の人々が現れ始めた（第2章 2.2.1(2)）。彼らはどのような存在だったのだろうか。

この点について、小田切（2013:384-385）は、時代背景の変遷と内発的発展論の興隆について、次のように俯瞰している。1980年代後半からのバブル経済により、地域は大規模なリゾート開発が地域振興の切り札として導入され、典型的な外来型発展の手段としてリゾート開発会社による大規模な開発が各地で計画された。しかしバブル経済の崩壊により、多くのリゾート構想は頓挫した。その後、バブル期のリゾート開発への批判として、経済発展だけではなく多様な目的を達成するために、住民が自らの意思に基づき、内発的に新たな地域を創り上げていく動きが活発になった。

地域が経済的に潤うことを最優先とした地域づくりは破綻し、そこに住み生活する人々が主体となって、地域のあり方を自ら考え実行していくことが必要になった。そのため、過疎化が進む現状と今後の行く末に危機感を覚え、率先して動き始めた一部の住民が存在し

た。

しかし、小田切は、内発的発展論にはいくつかのチェックポイントがあるが、「時代や地域を超えた一般性が強いもの」（小田切,2013：384）であるとした。内発的発展に欠かせない要素の一つとしてリーダーの存在があるが、それがどのような者なのかは具体的には不明ということである。田中（2021：13）も、先行研究を俯瞰し、地域づくりの主体の重要性にかんする指摘は多数あるが、単に指摘にとどまっているか、事例の中で当たり前のことだとして扱われ、共有された理論の枠組みは未だ存在していないとした。このように、地域づくりの主体は地域の住民であるという一般論以上の研究は見当たらない。地域づくりは、当然のように「住民」という集団が実践するものと認識され、さらに詳細な主体の研究は顧みられてこなかったと言える。

他方、地域づくりの担い手として地方公務員の存在がある。西尾（2012）は、政治家や住民とは異質な存在として公務員をあげる。「地域の政策課題を日々考え、制度を動かし、現場で奮闘している職員を欠いては効果的な地域づくりは進展し得ない」（西尾,2012：3）として、地域づくりの担い手としての地方公務員の重要性を主張している。さらに、坪内（2011：31）は「モチベーションとスキルが高く組織の枠を超えて活躍する、いわゆる『カリスマ公務員』」の存在を示唆している。

そのような非凡な才能をもつ地方公務員で、著書もある者のうち、例えば、高野（2015）は、石川県羽咋市の職員として地域再生に取り組み、ローマ法王に米を献上しブランド化に成功するなど、過疎高齢化に悩む地区の再生を4年で実現した。高野は、プロデューサーのような立場で、絶え間なくアイデアを提案し、計画を立て、地域住民を説得し、計画を実行し、成功に導くという並外れた能力を発揮した。外部からポジティブな評価¹⁷を受けるなど、外形的にも彼の能力は認められている¹⁸。

しかし、前述の坪内（2011：31）は、能力があっても地方公務員は「現実にはそうした職員は全国でも一握りであり、多くは人並み以上の能力があってもそれを十全に発揮する機会を与えられにくい」と指摘する。つまり「出る杭は打たれる」ような組織で能力を発揮するためには、組織内で物事を荒立てないための能力がさらに必要になる。1990年代の地域づくりに見受けられた、職場でも異質で目立つ非凡の者がリーダーシップを発揮して地域づくりをプロデュースするという構図は、地域の現実と乖離があると言える。

¹⁷ 平成20年度の農林水産省「地産地消等優良活動表彰」全国地産地消推進協議会会長賞を受賞している。
https://www.maff.go.jp/j/nousin/inobe/chisan_chisyo/attach/pdf/hyosyo-66.pdf 2025年1月10日確認

¹⁸ 総務省地域力創造アドバイザーとして活躍している。

<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO35731050V20C18A9MLF000/> 2025年1月10日確認

第3章 研究の方法

3.1 調査方法

3.1.1 ばかの語源と使われ方の歴史的経緯の調査

複数の辞書を参照し、ばかの語源にかんする通説の特定とその他の有力説を調査した。次に有力説のうち、第1章1.2.1で定義したばかの語意の語源となったと思われる語源について、用いられ方の歴史的経緯を、語源を研究した複数の文献によって調査した。

3.1.2 インタビュー調査

本研究では、地域づくりにおける「ばか者」の変容プロセスと役割を考察するために、2020年東京大会でホストタウン（後述）となった自治体の担当者の調査を行った。

本研究の調査対象にホストタウンを採用した理由を述べる。まず、大規模スポーツ大会と地域活性化を掛け合わせた取組は前例がなく、「これをやらなければならないというものがかっちり決まっていなふん、担当者はものすごく苦労した」（笹生ほか,2023:185）ことがあげられる。地方自治体は「終身雇用と遅い昇進を特徴とする役所組織にあつては、『上司に逆らえばとばされる』という意識の沈殿が積極的な政策立案・実施を抑制するベクトルとして働きがち」（三好,2010:4）な人事制度に代表されるように、前例主義、縦割り（セクショナリズム）による非効率性などが見受けられ、どこが担当するかも定かではないような新しい事業の実施に適した環境があるとは言えない。このような中で相応の成果を出した自治体には、前述の旧弊を打破しようと努めた担当者の存在が示唆され、当該者が第1章1.2.1で定義した「ばか者」とアブダクティブに類推されるためである。

ホストタウンの調査は、笹生ら（2023）が実施した全ホストタウンを対象とした事前合宿の状況、実施した事業の内容、ホストタウンの成果などのアンケート調査があるが、自治体担当者にインタビュー調査を行い、その成果を取りまとめた研究は管見の限り見当たらなかった。本研究では、自治体の担当者から得られる質的データに重要な知見が含まれている可能性があると考え、筆者が対象者へ直接インタビュー調査を行う方法を採用した。

2016年の第1次ホストタウン登録から2021年の2020年東京大会開催までにホストタウンに登録した533自治体のうち、2024年3月時点で相手国・地域との交流が継続している10自治体を選定した。そして各自治体のホストタウンの担当者10人にインタビューを行った（表3-1:A~J）。さらに、対象者へのインタビュー内容に関して事実関係の確認のために、ホストタウンの取組に協力した地域関係者（1自治体あたり1~2名）にもインタビューを行った。インタビュー対象者の選定では、自治体担当者から候補者を推薦してもらう協力を得た。同様に、当時の政府方針等の事実関係を確認するため、当時、内閣官房に所属していた関係者1名にもインタビューを行った。

ここで2020年東京大会後も交流が継続している自治体を調査対象とした理由は、継続した交流を実施している自治体は、計画に沿って事業を行い、相応の成果を上げたことを客観的かつ外形的に確認できるからである。なお政府の「オリパラ基本方針」¹⁹では、2020年東京大会後も継続した有形・無形の遺産（レガシー）を全国で創出すること目指している。それを受けた「ホストタウン推進要綱」²⁰では、ホストタウンに2020年東京大会後も継続した交流を行うことを求めている。

インタビューの方法は、半構造化自由回答方式のライフヒストリー・インタビューである。実施したインタビューは録音し、それぞれの「語り」を文字起こしして分析した。インタビュー調査では、就職前、就職後、ホストタウン担当着任時という時系列に着目し① 生い立ち・学生時代、②これまでの市内キャリア、③ホストタウンを始めた（担当となった）きっかけ・経緯、④当初どのような思いを抱いたか、⑤取組を進めるためのモチベーション、⑥市内の反応、を中心に聞き取りを行った。

また、各インタビュー対象者から、ホストタウンの取組を時系列的に簡略して記載したクロニクル（年代史）の作成を依頼し、全対象者から得た²¹。

¹⁹ 正式名称は「2020年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針」（平成27年11月27日閣議決定）（以下「オリパラ基本方針」という。）

²⁰ 首相官邸HP

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/hosttown_suisin/pdf/r2_torokushinsei.pdf 2024年12月28日確認

²¹ 既存資料がある場合にはそちらを提出してもらった。

表 3-1 本研究で対象としたホストタウンにおけるインタビュー対象者

	年齢	職位（級） ※1	自治体情報			ホストタウン 相手国 ※2	インタビュー	
			区分	地方	人口 (万人)		日付	時間
A	40代	課長補佐	市	東北	2.2	アフリカ	2024/6/23	1:30
B	50代	課長	市	東北	2.1	ヨーロッパ	2024/7/20	2:00
C	50代	主査	市	東北	11.7	ヨーロッパ	2024/8/ 3	1:30
D	40代	係長	市	東北	5.7	アフリカ	2024/7/20	1:10
E	60代	主事	市	関東	11.6	ヨーロッパ	2024/7/ 6	1:10
F	50代	室長	市	関東	7.3	アフリカ	2024/6/ 2	1:30
G	50代	課長	市	北陸	25.4	ヨーロッパ	2024/7/13	1:50
H	40代	主任	町	中国	1.7	中米	2024/6/17	1:00
I	50代	主査	県	九州	509.5	— (※3)	2024/8/15	1:20
J	50代	課長	町	九州	1.7	太平洋	2024/8/13	1:20

※1 2021年7月時点。自治体によって職位の名称が異なるため、総務省の一般例²²を用いた。

※2 複数国の場合には代表的な国（地域）とした。

※3 県下の基礎自治体が主団体である共同登録のため特定の国とのホストタウン交流はない。

調査期間：2024年6月2日～8月15日のうち10日間

出所：筆者作成

表 3-2 政府関係者へのインタビュー

	所属	インタビュー	
		日付	時間
K	元内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局	2024/6/27	1:30

出所：筆者作成

²² 総務省（2009）「地方公共団体における組織・職制構成（一般的な例）」『地方公務員の給料表等に関する専門家会合（第2回）配付資料』https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/chihou_salary/20976_1.html 2024年12月29日確認

3.2 ホストタウンの取組の概要

国際的な大規模スポーツ大会を契機とした地域の国際交流の源流として、1994年に開催された広島アジア競技大会における「一館一国運動」があげられる。広島市内の63の公民館が、それぞれ担当する国を決定し、相手国の文化等の学習、スポーツ用品等の援助、相手国の訪問や子供達の招待等が行われた（植木ほか,2005:260）。

さらに、一館一国運動をモデルとし、1998年に長野市で開催されたオリンピック冬季競技大会（長野オリンピック）では「一校一国運動」が展開された。同運動には長野市内の75校が参加し、大会の2年前から相手国に関する学習や相手国関係者を招待した交流会などの取組が行われた（加藤,2015）。このように、大規模スポーツ大会の開催と合わせ、開催地の自治体が大会に参加する国とともに国際交流を実施する事例が積み重ねられていった。

上記の国際交流に加え、事前キャンプの招致が地域活性化につながる風潮も生まれた。2002年に開催されたFIFA日韓ワールドカップでは、日本各地の自治体が、大会に参加した16カ国のキャンプ地として激しい招致合戦を展開した。その中には、大分県旧中津江村（現日田市）とカメルーン選手団のように、地域をあげた国際交流を行なった事例も誕生した（松村,2017）。この流れは、2019年に日本で開催されたラグビーワールドカップにも引き継がれていく。

このような大規模スポーツ大会時における草の根の国際交流の歴史を踏まえ、東京大会では政府が主導し、大会に参加する外国選手等と日本全国の地域との交流を促進する「ホストタウン」が推進された。以下、「オリパラ基本方針」からホストタウンに関する記述の抜粋を転記する。

「大会の開催により多くの選手・観客等が来訪することを契機に、地域の活性化等を推進するため、事前キャンプの誘致等を通じ大会参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図る地方公共団体を「ホストタウン」として、被災地を含む全国各地に広げる。」

内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局によれば、2016年に第1回の登録が開始され、2021年の2020年東京大会時には533の自治体が185カ国・地域とともにホストタウンとして登録された²³。そのうち、東日本大震災で被災した岩手・宮城・福島県の3県において、震災から復興しつつある姿を見せながら、これまでの支援への感謝を伝えるために、支援した国・地域の方々等を招待する「復興ありがとうホストタウン」には、

²³ 首相官邸HP「ホストタウンについて」

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/hosttown_suisin/pdf/about_hosttown_suishin.pdf

2024年12月26日確認

33 の自治体が登録した。さらに、パラリンピアン²⁴の受入れを契機に、共生社会の実現を目指す「共生社会ホストタウン」には、109 の自治体が登録した（全登録状況については図 3-3 を参照）。2021 年の 2020 年東京大会期間²⁴には、250 の自治体（累計）が約 8000 名の選手等を受け入れた（表 3-4）。

ホストタウンの具体的な取組は、相手国選手団の合宿の受入れ、相手国選手及び相手国市民との対面・オンラインでの交流、小中学校等における相手国に関する学習、相手国の食や文化等に関する学習・情報発信、パラリンピックスポーツの体験や普及事業などが挙げられる（笹生ほか 2023：29）。

ホストタウンは、オリンピック・パラリンピックという大会の性質上、当初は事前キャンプの招致を中心としたスポーツによるまちづくりを目指すものという考え方を持つ自治体が多数を占めていた。しかし、東京大会の効果を全国に波及させることや、地域活性化につながることを目標とした政府の政策的誘導により、ホストタウンは「各地で多様な目的をもってさまざまに展開」され、「経済交流や移民・移住に関わる課題を解決するといった、一見スポーツとは無縁そうなテーマを目的に設定」（笹生ほか 2023：52）した取組が多く見られたことが特徴である。元内閣官房の関係者 K は、ホストタウンの数だけ目的や目標が存在していたと述べている。各ホストタウンが相手国との関係を見つめ、どのような交流ができるかを考え、交流の目的を見つける。そのような地域の取組の結果として地域活性化の効果があつたと述懐している。

このような日本独自の取組は国際的にも評価され、2019 年 12 月 9 日に国連総会で採択された「オリンピック休戦決議²⁵」では、「長期に及ぶ草の根レベルでの関係が 2020 年以降も続くことを可能にする『ホストタウン・イニシアティブ』を通じて、日本の地方の市民と国外の参加アスリートとの間で行われる交流を促進しようと努めている」²⁶と記載された。

²⁴ オリンピック競技大会：2021 年 7 月 23 日（金）～8 月 8 日（日）、パラリンピック競技大会：2021 年 8 月 24 日（火）～9 月 5 日（日）

²⁵ 正式名称は「スポーツとオリンピックの理念を通じた平和でより良い世界の構築」。186 か国が共同提案した。

²⁶ 首相官邸 HP「ホストタウンの推進について」

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/hosttown_suisin/index.html pp.4 より転記 2024 年 12 月 26 日確認

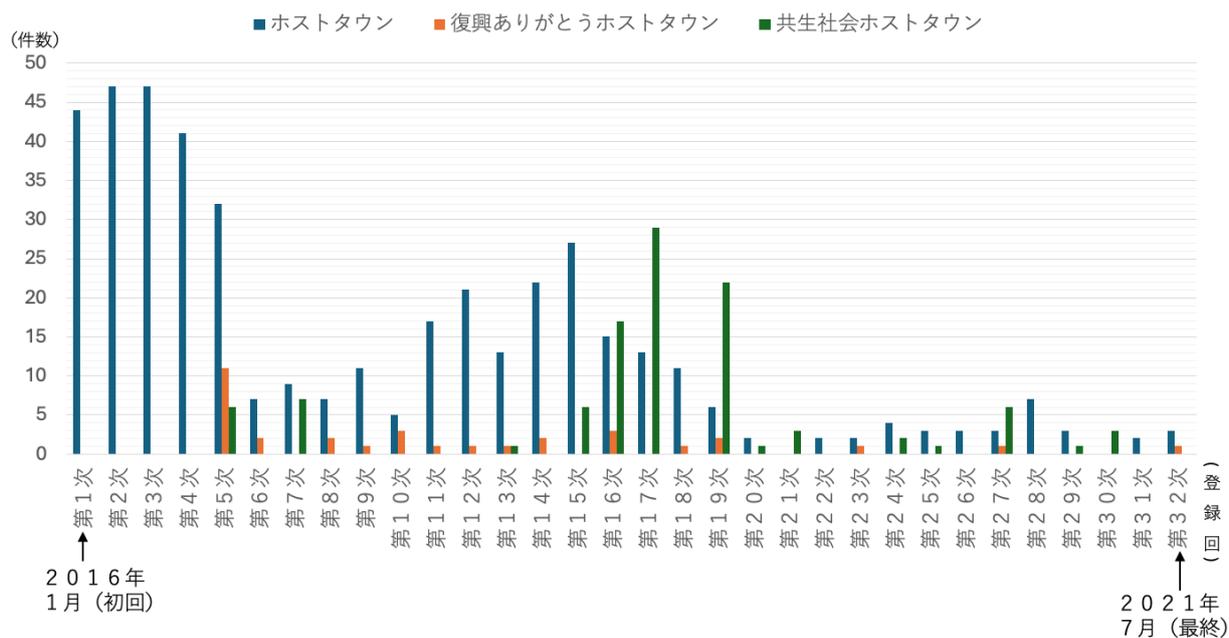


図 3-3 ホストタウン登録状況

首相官邸HP「ホストタウンの推進について」を基に筆者作成

(https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/hosttown_suisin/index.html)

表 3-4 大会時の事前合宿・事後交流

		自治体数	相手国・地域数	選手等の人数
オリンピック	事前合宿	183	79	6,349
	大会後交流	22	16	191
パラリンピック	事前合宿	67	39	1,627
	大会後交流	13	6	33

首相官邸HP「個別施策に係る政府の取組(資料)」pp.66より転載

(https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/pdf/riryoutorikumi.pdf)

第4章 分析結果

4.1 「ばか」の語源と使われ方の歴史的経緯

「ばか者」または「ばか」の語源を分析し、どのような変遷を経て第1章 1.2.1 に定義した語意を持つようになったのか分析を行う。

ばかの語源は複数あげられる。まず、痴を意味する梵語の moha (慕何)、または無知の意の mahallaka (摩訶羅) が僧侶の隠語として使われ始めたという新村の説 (新村,1995 : 278-280) がある。日本国語大辞典、広辞苑をはじめ主だった国語辞典に掲載されており現在の通説といえる。そのほか、日本国語大辞典には次の語源が掲載されている。①古くは「馬嫁」「破家」といった表記も見られる。「破家」については (中略) 家財を破るほどの愚かなことという意から転じて「愚か」の意となったとも考えられる。②近世になるともっぱら「馬鹿」と書かれるようになり (中略) 秦の趙高が鹿を馬と言って臣下を試したという「史記」の説話と結びつけた語源説が広く行われた。

松本 (1996 : 376-403) は、白楽天の「白氏文集」に登場する、驕り高ぶって没落した馬氏の邸宅である「馬家の宅」を語源と主張している。

一方、柳田 (1979 : 190) は、愚かという日常的によく使う語意を表す語をわざわざ海外から輸入して流布することの不自然さを指摘し、梵語起源説を批判している。代わりに、柳田は、日本古来の語である「ヲコ」が発音上変化して「バカ」になり、愚者を示す言葉になったと主張している。柳田によれば、中世の日本では人を笑わせる行為を「ヲコ」と呼んでおり、それを行う者を「ヲコの者」や「ヲコ人」と呼び、それらの人々が「途方もないうつけ者でなければならぬ理由は一つも存せず、むしろ正反対に、並よりも少し鋭すぎる者を、必要とする場合さえ多かった」(柳田 1979 : 197) としている。さらに、「ヲコ」が現代でいうばか者を意味する言葉ではなかったことについて、過去の文献における用例を列挙するとともに、「ヲコ」の性質を次のとおり説明している (柳田 1979 : 210)。

「ヲコの根柢には、最も広い意味の人間の不覚というものが、横たわっていることは事実であろう。普通の至って有りふれた生活知識、誰でも備えているような平凡な技術を備えず、または判断や予知力を欠いた結果、しばしばなみの人のせぬ事をしているのもヲコの一つ」

なお、柳田 (1979 : 230-233) は、「ヲコ」が、ばかに発音上変化したのち、愚かという意味だけになった理由として、人を笑わせることを意図していない者に向かって「ヲコ」と呼べば、呼ばれた方は心外であり、怒りすらするのではないか、そうなれば本来の道化的語意は衰退していき、愚かという語意が強調されてきたのではないかと推察している。

さらに、松本 (1996 : 254-264) も、日本国語大辞典の「ばか」の項目のうち、「愚か」の

語意について、同辞典に掲載されている文献の用例を検証したうえで、「ばか」の語意は「『狼藉（無法をなす、乱暴を働く）』であり、また、『人の狂乱（狂ったように乱暴なふるまい）』なのであって、のちの時代のように決して『愚か（者）』を意味したのではなかった」（松本 1996：257）と指摘している。

柳田と松本の主張に沿えば、ネガティブなばかは近代になって台頭してきたものであり、歴史上の用例からネガティブなばかの語意はそもそもなかった、あるいはネガティブとポジティブの両義的語意を有していたと言える。

「ばか」の語源について、各説の正当性を分析することは本研究の目的ではない。しかし、第1章 1.2.1 で定義したポジティブな語意の「ばか」から演繹的に推論すれば、本研究の範囲においては、柳田説が語源として適当である。「ヲコ」は、なみの人であれば到底行わないような常識を外れた言動を行うことにより、人々に笑いを提供していた。これは、第2章 2.1.1(2)で述べたとおり、現代のいわゆる「お笑い芸人」にも通底するものであり、現代においても「ヲコ」の精神は残っており、「ばか者」は「愚者」のようなネガティブな意味合いだけではない。

これらを踏まえれば、地域づくりに貢献する「ばか者」は「ヲコ」に近く、世間や社会的常識から逸脱する存在であり、「愚か者」という語意はない。

4.2 インタビュー結果の分析

4.2.1 A（40代、課長補佐、東北、相手国：アフリカ）

(1) ホストタウンの主な取組

小・中学校で相手国の文化等を学ぶ講座の開催、相手国のオリパラ選手団と市民のオンライン交流会、相手国と市内の小学生によるオンライン絵本作成交流、柔道着の寄贈などを行った。

(2) インタビュー結果の分析

インタビュー結果は表4-1に記載した。

Aは高校卒業後、専門学校進学を目指すも家庭の事情で断念し、一度就職し資金を貯めた上で関東の専門学校に進学している。そこでは子供たちとのふれ合いなどを通じて、楽しくて骨を埋めたいと思えるくらい充実した生活を送った。当初、地元で就職する意思はあまりなかったが、新しいプール施設が建設されたことに伴う地元の自治体職員募集に声をかけられ、学んだことが活かせると考え、帰郷を決意した。以来、ほぼ一貫してスポーツ部署に所属していた。

ホストタウンは当初登録の予定がなく議会でもそのように答弁していたが、登録のきっかけはAが海外からの客から言われた「せっかくの東京大会なのにどうして何もしないのか」という一言だった。Aは悔しさを覚え、2020年という東京大会まで相当間がない中ではあるが、ホストタウンの登録をするべく相手国の選定をした。しかし、当初想定していた国での登録は難しく、ホストタウン未登録国はアフリカなど日本となじみの薄い国ではあるが、もうそれしかないと考えて、登録に向かって突き進んだ。発展途上国であることやスポーツが強くないことなどから、市民が交流に前向きになってくれるかどうか不安があった。さらにホストタウンには決まった形がなく、全て自分たちで考えて行動しなければならず、これまで行ったことのない業務の連続であった。また、庁内でも、なじみの薄さを理由にホストタウン登録に反対する声があったが首長の判断で登録を進めることが決定された。

交流が市民に受け入れられるか不安だったAだが、交流事業を進めていくうちに、今まで交流がなかった国との交流ができること、発展途上国でも対等に交流するべきだという考えから、市の活動に賛意を示すメールが高校生から届き、Aは「もうその1通でよっしゃと思った」と発言している。これは、Aが子供の知見を広げることによって、地域に貢献できる、と考えたことと合致したものである。

Aは取組を進めるにあたっては、外部の海外専門家や課内の理解がなければ不可能であり、逆にそれらがあったので楽しめたと発言している。また、予算がなかったが、地域内や庁内のつながりを活用してアイデアを形にしていた。

表 4-1 A のインタビュー結果

生い立ち・ 学生時代	社会体育学科だったんですけど、これ地元になかったの、東京と思ってました。地域ではなくて学科なので。高校卒業してすぐ、もう学校に行きたかったんですけど、家庭の事情で、自分で行ければ行けばいいやと思って、一度就職をしました。
	もうやりたいことをたくさんやってました。楽しかったですね。夜間の学校だったんですけど、午前中とかスポーツクラブでバイトしたり、あと、水泳教室とか、体操教室とか子供たちと触れ合ったり。あと日本代表の選手たちが合宿するようなところだったんですよ。それがもう楽しくて楽しくて、骨をうずめたいぐらいの。
就職先	ちょうど屋内温水プールが、自分の出身の町にできまして学校卒業した人に声がかかった。私も声かかりまして、本当は帰りたくなかったんですけどちょっと受けてみようかなという気持ちで受けました。まあそうですね、勉強したことを生かせるかなとは思いました。（地元に戻るのは）まだ早いなって思っていました。
庁内キャリア	当初教育委員会のスポーツ部に配属になって、それでずっと同じ部署にいて、（自治体の）合併になってから2年間だけ公民館に異動になって、また、スポーツ分野に戻ってきたという形です。
ホストタウンを始めた（担当となった）経緯	議員さんからもホストタウンやらないんですかっていう質問が出てそのときは、こちらでやる予定はありませんって実は答えてるんですよ。 2019年にある国のスポーツクラブの指導者の方々を受け入れたんです。そのときに、どうしてオリンピックのことに興味がないのって、せっかく日本でやるのになんで何もやらないのってというようなことを言ったんですよ。だからそうだよなって、私達なんで何もやらないんだらうって言うふうに思い直しまして、そういう話に進んでいきました。
当初どのような思いを抱いたか	不安だらけでした。全然なじみのない国で、あとは発展途上国の国っていうのも心配されました。アフリカってもうあまり（スポーツが）強くないというんでしょう。知らない国っていう感じで。 やっぱり市民も多くはそうなのかなっていう思いがあって、この交流はうまくいかないんじゃないかなっていうのが大きかったです。 スポーツ関係の海外の交流はあるんですけど、それは決まった形やっていくので、ホストタウンは、もう目的からな、どういことをやるのかからみんな自分たちで考えながらっていうのだったの、そこが大変だったというか、今までやったことがないことの連続ですね。
	にかほ市では障がいを持っている方のスポーツはあまり進めていなかったの、この機会に勉強会とかしたら、何かきっかけが生まれるかもしれないなというのはありました。
モチベーションは何か	外国の人たちから言われたのがすごく悔しくて。もうこのまま何もせずに終わってしまうのかっていう思いはありました。 もう本当はやりたかった国とのホストタウン交流はちょっと難しいんだというのがわかったの、未登録の国を受け入れようということでもうそれしかないっていう形で。何かもうオリンピックに関わろうということであっ走っていったというか。 仕事終わってからも家に帰っても夜も休日もいろんな国のことを調べてるんですよ。子供たちからも、あまり一生懸命すぎて、聞かれました。どうしちゃったのとお母さんと。何か取り憑かれてるみたいだよと。本当にその通りで。
	その当時高校生からメールが一通来たんです。アフリカと交流するって聞いたのがすごく嬉しいですっていう。そういう方々との交流って今までなかった。自分はそういう国の人をたちとも平等に交流というか、下に見るんじゃなくて、対等にお話したりするべきだってその高校生が考えて、それを市でやってくれるっていうのがすごく嬉しいですって。もうその1通でよっしゃと思っております。そういった方向性が合ってるなら大丈夫だと思ってでした。
庁内の反応	やはり今まで交流のないところなので、もう市長にこの交流はやめようという人もいたんですけど、市長がやる、やります、知らない国ですけどやります言ってくれたんで進みました。
	市の予算は増えません。駄目でした。なので、地域の方々の方協力を得ながら、お土産なんかも本当にお金を使わずに、お母さん方の手作りとか子供たちの手紙の交流とか、お金のかからない交流を逆に工夫して。 JICAの方がとても協力的だったんで、一緒に考えながら、こういうことはどうだろうか、こういう交流はどうだろうかみたいな提案をしてもらいながらだったので、楽しめました。課内の理解もあって、孤立していたら進められなかった。
その他	（地域の人の協力をどう得たのか）小さい町なので、みんなで情報を共有するというか、他の課のことも課長会議とか、市長の挨拶とか、広報に出してるコラムとか、なんですけど、みんなで共有していくっていうのはあります。
	子供たちの知見を広めるっていうことで、それが地域のためになるという思いはあった。もっといろんな国があるんだよっていう生で勉強できたっていうところは良かったかな。

出所：筆者作成

4.2.2 B (50代、課長、東北、相手国：ヨーロッパ)

(1) ホストタウンの主な取組

事前キャンプの実施(2017、2018、2019、2021年)、トップアスリートによる公開演技会(2017、2018、2019年)、相手国よりスポーツ国際交流員(SEA²⁷)の派遣、ファンクラブ結成、相手国でのテレビ番組放映などを行った。また、ブルガリア初の新体操金メダル獲得のために尽力した。

(2) インタビュー分析

インタビュー結果は表4-2に記載した。

Bは、雪原を引き合いに出し、人の歩いた跡をたどるのではなく、自ら新しい道を切り開くことに楽しみを見出すと発言した。大学は、定石の東京ではなく、あえて隣県に行っている。一方、周囲や親の勧めもあり、安定性を重視し、地元の自治体に就職した。

庁内のキャリアは、市の政策形成の中核である企画部署に長期間在籍した。ここで仕事のやり方を覚えたと言っている。その後も官房系部署への配属を経験しているが、ある出来事によってキャリアに変化が生じ、外部部署へ出向している。Bは市民と近い仕事をすべきだと考えていたので良い経験ができた。

ホストタウンを始めた経緯は、ホストタウンの要項を見た際に、これならなんとかできる、絶対地域のためになると直感し、やらなきゃならないと思ったと言っている。Aはオリンピックには様々なポジティブな力があると考え、過疎化などの地域の暗いイメージを払拭し、子供や市民が自ら関わっていくことによって地域を活性化できると考えた。

しかし、予算の確保や、なんの実績もない自治体によるトップアスリートの事前合宿の招致など、常識で考えれば成功率は厳しいものがあつた。様々なルートで働きかけをしたが、合宿招致はうまくいかずこれは駄目だと思っていたところに病気をして入院してしまった。職場復帰をすることができ、退職までの数年間の最後の仕事として、役所生活の全てのチャンネルを使ったり、全ての活動を糧にして取り組んだと言っている。

Bは友人から「XXXX」²⁸(地元の方言)と言われて、否定したと言った。「XXXX」は生意気という意味で、非常にネガティブな意味であり、地元ではそういう人はまず潰されるといふ。しかし、「XXXX」には常識から外れて、論理にとらわれずに物事を実行するという意味もあると考えており、自らの行動にもそのような点があつたかもしれないと言

²⁷ Sports Exchange Advisor。特定のスポーツの専門家として、地方公共団体で学校の生徒や地域の優秀な選手に対するスポーツ指導の補助等にかかわる。一般財団法人 自治体国際化協会 HP https://www.clair.or.jp/j/forum/forum/pdf_279/09_katuyou.pdf 2025年1月23日確認

²⁸ インタビュー対象者の匿名性を担保するため、方言の単語は伏せ字とした。

した。

庁内では、ホストタウンのわかりにくさもあり、最初は大半が反対であった。Bは、何かを提案すれば反対されるという雰囲気も理解できるが、力を出し惜しみしてはいけない、地元の人がまず率先して地域を良くしていかなければならないと発言した。結果として、熱意ある行動が「ひと」・「もの」・「こと」を動かしたような気がするとした。

表 4-2 B のインタビュー結果

生い立ち・学生時代	1回県外に出てみたいと思いましたね。やっぱり東京もいいんだけど、ちょっと隣県もいいかなと。隣県大学がいいかなと思ったんですけども。東京はみんな東京東京言ってるからなんか行きたくないと思ったんだけど、結構お金かかるだろうなと思ったんでそんなに何て言うか、負担も大変だろうなと思ったこともあるし。
就職先	最初は民間に行くかなと思ってたんすけど、結果的に地元に残っちゃった。みんな公務員の方がいいじゃないかって、県内だとやっぱり公務員安定しているしなっていうか、将来の展望って生活の基盤とかはもうしっかりしてるからいいんじゃないかとみんな思ってたと思う。仕事に対する意思ってのはあんまりなかったと思うな、親もそういう安定のがいいんじゃないかって言ってたから安定志向になったのかも。考え方もあんまりなかったから楽なのがいいんじゃないかなと思ったかもしれない。
庁内キャリア	企画部署に9年在籍した。その際、姉妹都市や国際交流員の招聘など国際交流業務も体験する。役所の仕事はここで覚えた。その後、さらに官房系の部署も経験したが、ある出来事があり外部部署へ異動。そこでは市民と一緒に様々な取り組みを進めた。元々市民に近い仕事をするべきだと思っていたので、良い経験ができた。そのあとは企業誘致担当などを経験した。
ホストタウンを始めた（担当となった）経緯	2016年の夏ぐらいにホストタウン登録の要綱が回ってきたのね。そのときに思ったのはオリンピックあるって聞いたんだけど、そういうオリンピックの時こんな事業があって、しかも俺の課にこんなことだったのかみたいな感じだったの。いやこれしなきゃならないなと。ちょっとばっと思って、ぐるぐるって頭回ったんだけど、これだったら今までやった中で、何とかできるんじゃないかなって。
当初のような思いを抱いたか	やっぱりお金かかるしね。あと海外のそんなトップチームを招聘できるのとか。今までの実績ある市が合宿に名乗りあげていて、そんな中で大丈夫なのかってのはやっぱりそれが普通だと思う今考えると。私もいろんなことをするに確率論で動かなきゃとかあるし、これやったら成功する確率はあるけど、失敗するんだったらやらないみたいなところあると思うんでね。私もそういうふうに来てきたし、やっぱり今回のやつって、成功の確率ってどれぐらいかなと思ったときに、厳しいだろうなと思いましたけど、でもそれは多分そのときに不思議なんだけどあんまり失敗したこのことは考えなくて運かなと思ってましたけどね。
モチベーションは何か	こういうのは子供たちとか市民とかって何かの形で関わっていかないと、地域も面白くないんじゃないかと思ったし、私も面白くなかったから関わりたいなと思って、これはやらなきゃと思ったの。 オリンピックってなんていうか力があるじゃないですか。経済的な効果みたいな活性化するための力みたいな話とか、子供たちに夢を与えとかね。未来が明るくなるような力があるんじゃないですか。そういう力にあやかりやりたいなと思ったの。地域の活性化に何かの形で絶対プラスなんじゃないかと。地域は過疎化も激しくて、だからすごく暗い、私は暗いイメージだと思ってんだけどやっぱり明るくして、やっぱり夢がなければ住む人なんかいないと思うから、オリンピックのようなことをできるんだってやっぱり素晴らしい夢が市民にあるし、活性化も何かの形になるんじゃないかなと。計算してこれぐらいの効果あるかっていうふうには思ったんじゃないんだけど、直感的にね、絶対これ地域のためになると思って。 私病気で入院したりしたんで、ちょっとこれは職場復帰できないだろうなと思ってたことがあって。当時ホストタウンってのはもう始まったので、これまで国際交流やってたルートでいろんな国に働きかけはしてたんだけど、なかなかうまくいなくて、これは駄目だと思ってたんですよ。だけど職場復帰できて、そしたらもう退職もあと三、四年でなるから最後の仕事やってもいいかなと思ったのかも。30何年間ぐらいの役所生活の全てのチャンネルを使ったり全ての活動を糧にしてやったとは思う。
庁内の反応	調整は必要ですね、必要だけどなかなかホストタウン事業そのものとか効果がわかりづらいとこでしょうね。国際交流自体がそうかわかんないんだけど基本的には皆さん反対だったんで。最終的には皆さん賛成してくれたけど、一番最初は反対だったな。だけどやっぱりよ、人を動かすためには熱意とか情熱とか、そういったものが大事なんだな。それがないと人や色々は動かない。 やっぱり夢を抱きながら村山市住んで、将来村山市に帰ってくるとか村山市に住み続けるとかねそういう人とか、地元の人が頑張んなきゃ駄目ですよ。力出し惜しみじゃ駄目ですよ。みんな力持ってるんだけど、出し渋りしてんだねやっぱり。私も何を言われるからこうやると何言われる、こうやって批判される、こうやるとやっぱり反対されるみたいなことがわかるよ、やっぱりできないと思う。関係課長会でよ、7割8割という人たちが反対だった、普通はできない、できないしね。
その他	新しいことは好きです。なんていうかな雪原ね雪の道、雪原は例えば、他の人が先人がね、足跡つけたと、いうところがあると私はあの、その足跡受の上じゃなくて、白いところわざわざ足跡をつけていくようなタイプだったと。 この前友達あって、お前XXXXだなんて。違うと私は否定したんだけどね。生意気って意味なんだけど、なんか生意気よりもっと何か超越したみたいところあるんだけど、非常にネガティブな人で、世間から外れたみたいな感じのところもあるみたいな、横暴みたいに捉える人もいるんだけどね。あまり良い言葉じゃないんだけどな地元では。まず潰されるのよ。（常識から）かなり外れているんなことに前向きに取り組みみたいところなんだよな。あんまり理論みたいなのにとられないで行くっていうかな、そういう感じのところもあるんだけど。 いや私は常識の中で動くとしてるんだけど、でもやっぱり皆さんの常識とは違ったようなところがあったのかも。しれません。

出所：筆者作成

4.2.3 C (50代、主査、東北、相手国：ヨーロッパ)

(1) ホストタウンの主な取組

事前合宿の受け入れ(2018、2021年)、ポッチャ市長杯大会の開始、アーチェリー・ポッチャのオンライン大会開催などを行った。

(2) インタビュー分析

インタビュー結果は表4-3に記載した。

Cは高校まで県内で進学し、家庭の事情で大学への進学はせず、親の勧めに従って自治体に就職した。市内でのキャリアは、病院の医療事務職を10年以上経験し、1番長いキャリアである。スポーツは地元のスポーツ少年団の指導をしていたほかはあまり縁がなかった。

Cがスポーツ部署に配属される翌年に、スポーツ少年団の海外派遣の世話役でX国へ同行した際、ある町の交流協会の会長から交流の相談があり、東京大会が開催されることを踏まえ承諾の返事をした。その後、ホストタウンを知り、かつての申し出が実現できるかもしれないと考えたことがホストタウン登録の端緒だった。

不安だった点は、ホストタウンのような取組は市内で全く前例がなかったことや、新規事業に対する予算や職員の配置の難しさなどがあった。

Cは、スポーツに特に詳しくなく、なにか強くやり遂げたい目標があったわけではないが、X国²⁹の人がたくさん地元に来てくれたらカッコいいと思ったことや、子供たちが渡航できる機会になると感じた。C自身がホストタウンを契機に海外に行く楽しさを発見したので、若い人を海外に行かせたいという思いがあった。

Cは中学生の頃に先生の影響もあり成功のイメージを考え、やってみようと思うようになった。また、思いつきで失敗する可能性があったとしても、実行しなかったことに後悔をしたくないという強い思いがあった。

自由に相手国を選ばせてくれた首長や、途中でスポーツ部署から異動したにもかかわらず、課内の理解により、違う部署であってもホストタウンに取り組みさせてくれたことなど周囲の協力があった。

X国のポッチャチームが来日し、市民との交流や大会を行ってくれたことが、市にポッチャが根付く大きな要因となった。Cはポッチャのルールも当初知らず、広めようという気もなかったが、X国のポッチャチームの、重度障害でもできるスポーツを知ってほしいという思いに強く共感した。大会直前にX国のサッカーチームから事前合宿の打診があり、受け入れはできなかったが、Cはホストタウンの成果と受け止め満足したと発言した。

²⁹ インタビュー対象者の匿名性を担保するため、相手国名は伏せた。

表 4-3 C のインタビュー結果

生い立ち・学生時代	本当に外に出たことないですね。外で一人暮らしもありません。
就職先	親が進学はしないで就職しようっていうことで、もう親のすすめのまま市役所を受けたような状態ですね。
庁内キャリア	採用後、病院の医療事務職を10年以上経験した。その後、本庁に異動し、総務部で税金関係、健康福祉部で障害福祉等をそれぞれ5年以上経験し、スポーツ部署へ異動した。
ホストタウンを始めた(担当となった)経緯	スポーツ交流の受け入れしてくれたX国のある町の日本との交流協会の会長さんが、同じような交流したいんだけど、ちょっと話聞きたって言われて、話をしたんです。ちょうどオリンピックでも事前合宿とかやるので、ぜひ交流できると思いますっていう話をしたんですね。そのときはお話だけで終わったんですけど、2016年に今度内閣官房さんでホストタウンやるっていう話が出たときに、事前合宿とは違う取組であってオリンピックが終わっても交流を続けていくっていうのが、レガシーを持ってやるんだっていう取組だっているのを見たときに、あのときX国行ったときに交流しようって言われたなと思って。(交流協会の会長に)こんな取組をやってみようっていうことになったのがきっかけなんです。(何かできるかも)思わず思いましたね。X国しかないなと思って。X国ならすぐできるって。
当初どのような思いを抱いたか	X国の人がいっぱい来たらカッコいいなと思いました。X国好きだからそう思ったのかもしれないんですけど。スポーツは嫌いじゃないですけど、選手も何も知らないですよ。なんかサッカーが来たら面白いねなんて思っちゃうぐらいで、子供たちがX国にまた行ったり、それをスポーツ少年団に入ってなくてもいいからという取り組みができるかなって思いましたね。ただ海外に若い人を行かせたいという思いはずっとあって。そしたら自分が若い子たちと一緒にいったじゃないですか。自分は若くないけど、海外行くと楽しいなって思って。だからもう若い子に本当に行ってもらいたいなってただ何となくそう思っただけだと思うんですけど。(海外に行くことが楽しいと、もっと若い頃に行けることができたなら人生が変わったか?)やっぱりそうですね自分には相当ありましたね。
モチベーションは何か	<p>なんだろう。何かただX国と交流したかったんですね。ただそれだけでもうあとやらないといけないじゃないですか、途中で投げられないっていう。ただ、スポーツ課をX国のポッチャの人たちが来た後に異動したわけですけど、すごく大変で、なんか楽しくやりたいのにつらい仕事になって。これ仕事でやりたくないなと思ったんですね。でもね、そこを出たおかげでホストタウンから縁を切ったわけじゃなくて、もう外部として手伝える。っていうか、アイデア案も出しながら、一緒にやるっていうのができて、よかったなと思って。(不安だった点は)予算ですね。すべてにおいて前例がなかったし。途中で予算が足りなくなって財務部署に増額をお願いしたり。怒られましたけど。新しい事業に新たに人や予算をつけることはなかなか難しいんだな。小さな自治体で市民の税金を投入するのは難しいこと。</p> <p>なんかその頃(中学時代)も障害者によくふれてたんで、障害のパラリンピックもそうですけどそれは私の運命なのかなって思っています。障害者のふれるのが嫌でもないし、うん。見た目で見ることができないを決め付けるっていうのも好きじゃない。障害があってもできるとかっていう感覚は持たないんですけど。</p> <p>それがいいかどうかは別として、駄目だったらあれだけやってみようかっていう意識はありますね。やらないでできないっていうのは無し。やらずに後悔するよりはやった方がいいっていう感じ。</p> <p>失敗したって思うことはありますよ。でもあのときあれやればよかったっていうのが嫌なんです。やっとならよかったなって。怖がるっていうか、怖いもの知らずと言われるかもしれないですけど、何か発見っていうか、思ったことは、やってみるではないんですけどあれやればよかったっていう後悔は嫌なんですよ。</p> <p>成功したら面白いじゃないですか。楽しいじゃないですか。成功したときの絵がやっぱ何となく頭の中にぱっと浮かんで、これやるしかないみたいな。(いつ頃のように自覚したのか)そうですね中学ぐらいですかね。なんでだろうな中学校は学校の先生とかにもよるんじゃないですかね。学校の先生嫌いなんですけど、普通友達みたいに接してくれる先生がたまたま担任だったので、理解してもらえたし、その頃かな。</p>
庁内の反応	<p>最初に市長に、課長を通して、どこかの国選んだ方がいいんじゃないか聞いてくださいってお願いしたんですね。やっぱそことするようになっていう指示が出るかなって思っていたんですけど。どこでもいいよみたいな感じで無かったんですね。課長は私がね、頑張ってるの知ってるからX国とやればいよいよねみたいなそんな感じですね多分。</p> <p>それは当然家族の理解もあってだし、もう異動したスポーツ課の仕事をしたことは今いる職場の人たちも理解してくれてるっていう。</p>
その他	<p>すごいポッチャ鶴岡いっぱいやってますよ。ずっと一生懸命やってるんだっていう障害者の人がいて、私大会とか交流会あるときに顔出すんですよ。顔を出すと喜んでもらえるし、私としては何か自分が持ってきた競技っていう感覚があって、だからこんな広まるってちょっとびっくりしていますね。なんとなく責任感しているような気持ちでいるんですけど悪いことしてるわけじゃないと思いますが、こんなに大丈夫みたいな。</p> <p>やっぱりX国側の皆さんがあつたポッチャを重度の障害があってもできるんだっていうのを知ってもらいたいんだっていう気持ちがあったと思うんですけど、その執念が残ってるのかなって思いますね。彼の存在もなくなったことも誰も何も知らないと思うんですけどポッチャは鶴岡に残ったっていう感じですね。</p> <p>(X国のパラリンピアン宿泊先が見つからず)障害社会福祉協議会の方で、ここで、ここでもよければっていうこと言ってくださったので、デイサービスのところを使わせてもらいました。</p> <p>(障害関係の部署での経験が活用できた?)そうですね。人との繋がりもちょっと顔見知り程度程度でしたけども理解してくれて応援してくれたっていうのがすごく良かったなと思います。</p> <p>(アイデアを活かすような場面がこれまでの)仕事上はないんですけど、作業の一部としてはこうやったら楽になるとか、こうやったら見やすいとか、そういったのは常にやっていますよ。こうやったら楽とか。</p> <p>X国から、X国のお家芸のサッカーのチーム合宿したいと言われたことだけでも何か満足したなって思いました。ホストタウンやってやったからだと思って対象選手も選手もわかんないのに。</p>

出所：筆者作成

4.2.4 D (40代、係長、東北、相手国：アフリカ)

(1) ホストタウンの主な取組

相手国へのスポーツ指導者・少年団の派遣と現地での交流事業、相手国の子供たちの招聘、相手国災害への義援金の寄付、交流記念モニュメントの設置、中学生によるオリジナルの応援動画撮影などを行った。

(2) インタビュー分析

インタビュー結果は表4-4に記載した。

Dは、地元で一生暮らすことは本意ではなく、自分の可能性を探すために関東の大学に進学した。大学はほとんど行かず、かなり尖っていたと自認していた。卒業後、地元に戻るつもりはなかったが、親の求めにより地元の自治体に就職した。

市内でのキャリアは、異動スパンが長く、総務、農林、下水道、スポーツの4カ所は同自治体の中でも例外的だという。官房系部署は全く関心がないが、上司は行かせようとしていた。評価してくれているのだろうという発言があった。

ホストタウンを始めたきっかけは、復興ありがとうホストタウンの趣旨を知ったときに、東日本大震災の支援を受けるばかりではなく、御礼の気持ちを特に表明する時期に来ていたことを自覚し、ホストタウンはそれが可能になる手段だと考えたことによる。オリンピックをどんどん利用してやろうと思った。

実施内容が自由というホストタウンの性質上、ゴールが見えなく、正しいやり方も見えなかったため、悩む激しさは半端なかったとの発言があった。しかし、特にネガティブになることもなく、市の職員として、必要だからやる、やらなければならないという使命感があったが、使命感だけでは続かず、挑戦する楽しみが大きかったとも発言していた。自分以外の職員がやればうまくいかないだろうという思いがあった。

通常の手続きでは実現できないため、イレギュラーな処理がたくさんあった。まったくシナリオがない中で、周囲の助けを借りてやりきったという思いがある。

市内では、反対する人はいなかった。推測だが、みんな支援に対する御礼をするタイミングに来ているということを理解していたのだと思うとの発言があった。そしてそれがどれだけ大変かということも理解していたと思われる。

ホストタウン、特にオリンピックは一生に一度程度しかない経験なので、多くの市民が関われるチャンスを作りたいと考えていた。

表 4-4 D のインタビュー結果

<p>生い立ち・学生時代</p>	<p>田舎町で育ったので、どうしても何かになりたくってという感じですかね。それは、今ある自分以外の自分になりたいみたいなそんな感じでしょうね。 田舎町で普通に農協とかに勤めて一生暮らすより何か、日本以外というか、井の中の蛙じゃないですけど、井戸から飛び出したいみたいな、そういう願望ありましたね。とにかく関東方面に逃げ出したいと思ってたんです。 かなり尖ってる方だと思いました。そうになったらやっぱり大学にほとんど行かなくて、多分みんな真面目に行ってたんじゃないですかね。 そうですね。当時からドイツのあれですけど、トリックスターだと思われてたと思うし自分もそう思います。</p>
<p>就職先</p>	<p>卒業後1年ぐらいレストランで契約社員やってたんですけど、レストランで働かせるために大学出したんじゃないとか親が言い出して、役所だけはまず受けろって言われて仕方なく受けに行ったら、受かったということですかね。</p>
<p>庁内キャリア</p>	<p>採用後、総務部署の文書担当を経て農林部局に異動し林業や鳥獣害対策を担当した。その後、下水道部局に異動し、東日本大震災に遭遇した。その後、スポーツ部署に異動した。 (官房系部署は)全く興味ないです。むしろ向いてないと思ってます。だけど、私の過去の上司とかは企画が向いてるから絶対企画目指せて言われて、私も人事異動の希望とか出すときに、楽できるあの公民館とか、そういったところを出すというのが当時の上司が握りつぶして、そういった企画に行きたいと言っていましたとか、でも上司は多分そういう評価をしてくれてたんですね。 オリンピック決まって1年後ぐらいにホストタウンみたいなことをやりましようっていう話になってきて、その時点でまずオリンピックスポーツなんて当時から当時の市長の前市長ですけど、はあのスポーツ大好きなんで、なんかしなきゃいけないってのがちょっとスポーツ局のプレッシャーとしてはありまして。そうですね。その流れの中でホストタウンどんなふうになっていくっていう中で、みなさんもやった流れに入っていくって感じですね。</p>
<p>ホストタウンを始めた(担当となった)経緯</p>	<p>うん対外的にアピールできてなかった。それはやんなきゃいけない、あの支援を受けるばかりじゃなくて、受けた以上はありがとうってやっぱり言いたい。不特定多数のいろんな方にもらったので、それをどういうふうに表明するかっていうその一つ的手段としてホストタウンっていうところは復興ありがとうホストタウンってところは一つのポイントというか、少しそれが可能になる手段だったなとは思っている。 この国際的なイベントに関わることによって、震災と現特に原発事故でマイナスイメージがあった中で、打破する一つのきっかけというイメージはあったでしょうし、どっちかと言うと私が担当になったら、あのオリンピックどんどん利用してやろうっていう。</p>
<p>当初どのような思いを抱いたか</p>	<p>市としても、その震災の支援のメッセージ、ありがとうっていうメッセージを発信するっていうことが必要だろうと思う。支援を受けるばかりじゃなくて、ありがとうございますっていう気持ちを特に表明するっていう時期に来てたんです。 (先が見えない時期だった)むしろだからこそやんないといけないと思いました。我々は正しく怖がる事ができていたので、どれぐらいリスクがあるかとか、ていうことがわかってるので、それを何でしょう。むしろ放射能アレルギーみたいな人たちに対してアピールしなきゃいけないと思ってました。正しいことを知りたいとかっていう方に対して正しくアピールする、地域住民が今元気に暮らしているし、正しいことをお伝えして、なおかつ我々は皆さんのおかげで今がありますっていう、そのメッセージを伝えるっていうことは、逆に原発事故でたくさん風評被害を受けたからこそやんなきゃいけないとは思ってました。 体を使う激しさはなかったですけど悩む激しさは比じゃないですね。ゴールが見えないので、正しいやり方も見えない。 (協力者からアイデアを)もらったら、それに何とか食いついていくっていう。もうフリースタイルでやれって言われたら多分できなかった。</p>
<p>モチベーションは何か</p>	<p>どうしようかなってよりやるしかないと思ってたし、やるのがすごく大事だと思いますし、あんまりアイデアはなかったところでどうすればいいかなみたいになったら、それでいて、特にネガティブな感じにはならなかったですね。もうやるしかないともうこうでしたから。 一番大きいのは、(地域の住民に)自尊心を取り戻してほしいと思いました。市の市民から、支援を受けてばかりとか、そういったところからちゃんとありがとうって言えたっていう。 やっぱり市の職員として、必要なことだからやってるんでそこに関しては。すごい限度あるけど、やんなきゃいけないことはやんなきゃいけない。 やっぱり他の人にこれやったら、多分無茶苦茶になるか、もしくはその人潰れちゃうかっていう。俺だったらうまくできるかもしれないっていうか、難しいけど、自分以外の誰にこれができるでしょうって感じはありました。何か挑戦する楽しみみたいなものしかなかったです。私は使命感だけで多分あれできないっすね。もうやらないっすもん。 なんでしょね。あんまり立ち止まってゆっくり考えるってことが当時できなかったんでしょね。でもやんなきゃいけないと思ったら、自分は何でもなるんで、何とかやろうって。今でもその傾向あります。</p>
<p>庁内の反応</p>	<p>やっぱりあのときすごいイレギュラーないろんな役所内の処理はしたんですね。海外の人を招聘した時、旅費どうすんだとか、昼飯代どうすんだとか。そのためにはもういろんなね、役所内のいろんな部署に相談しに行き、いろんなところでこれで行こうってところを教えてもらったりして。イレギュラーありきっていうか、その気持ちはできました。なんかシナリオ通りのことじゃなくて。そのとき苦労したのもあるけど、やっぱりみんなが協力してくれるっていう。みんなに助けてもらったんで役所中の人もそうだし、すごい助けてもらって何とかかんとかやりきったっていうか、うん何とかなるっていう。 雰囲気というより、反対する人はいなかったですね。むしろ、これは推測ですけど、客観的に見たらありがとうございますって気持ちを表明するってことの大事さは多分みんな理解してたと思うんですけど、それがどんだけ大変なことでも多分理解してたと思うんで。なんかあいつらにやらせよう、なんか大変だねみたいな。</p>
<p>その他</p>	<p>一生に一度ぐらいの経験なんでそれをやっぱり子供たちもそうですね、市民皆さんにずっと関わってもらいたい、関わるチャンスなるべく作りたい。</p>

出所：筆者作成

4.2.5 E (60代、主事、関東、相手国：ヨーロッパ)

(1) ホストタウンの主な取組

事前合宿の受入れ、パラアスリートと小中学校のオンライン交流(2020年25回)、小中学校オンライン相互交流(2020年6回)、小中学校オンライン相互音楽交流、ホストタウン3市町連携事業(食、絵本作成、音楽)などを行った。

(2) インタビュー分析

インタビュー結果は表4-5に記載した。

Eは大学時代に海外に関心をもち、就職先も海外勤務を視野に入れていたが、両親の求めにより地元の自治体に就職した。

庁内のキャリアは、保健、財産管理、税務などを経験した後、商工観光に異動した。そこで、上司から海外との姉妹都市交流の提案を早急に作るよう関係部署の管理職に指示があった。しかしながら資料を作成したのはEだけで、企画から実施まですべてを担当することになった。大変だったが勉強になったと発言があった。しかし成果が出る前に異動することとなった。

スポーツ部署でホストタウンを担当し、登録を目指すが、ある出来事によって途中で異動せざるをえなくなったため、個人的に道半ばと感じていた。このため、自分で蒔いた種を育てたいという思いから、低い身分だったが再任用先として志願した。当時のホストタウンの取組は停滞していた。

ホストタウンの話を最初に聞いたときに、Eは即何か反応してしまった。おそらく、かつて志が果たせなかった海外事業に重ね合わせ、チャンスが再到来したと考えたのではないかとEは述懐している。

Eは好奇心がとても強く、旺盛なチャレンジ精神あり、他人と同じルートをたどるのではなく独自の道をたどりたいという思いがあった。それに加え子供たちの視野を広げたい、それを継続させたいという思いがホストタウン推進のモチベーションとしてあった。

自治体の業務は、計画を作成することにエネルギーを費やし、その実行については強く考えていないことや、ルールから逸脱しないことが基本であり、新しいことを始めるためには殻を少しでも飛び出すことが必要だと感じている。Eはホストタウンでは段階も踏まず、市民に直接依頼を行っていたため、庁内からは批判的な意見がでることもあった。

自分を理解してくれる人に恵まれ、そういう人たちに話をすれば事業が形になっていくという自信があった。このため、事業を進めていくうえでの不安はなかった。

表 4-5 E のインタビュー結果

生い立ち・学生時代	(海外への興味について) 大学入っている人連中と関わって話を聞く事にだんだん興味が湧いてきましたね。異文化がやっぱり面白いっていうか、もう体質っていうのがあったということなんじゃないかな。
就職先	元々性格的にも海外にはすごく興味を持っていて、大学終わった後の就職先は、海外をちょっと希望してたんですが、現実的に親から戻ってこいって言われて戻ってきて公務員になったっていうのが実際の形なんです。
庁内キャリア	採用後、教育委員会に配属された。次に、保健部署に配属され老人健康保険を担当した。その後、総務部署で財産管理を担当し、税務部署へ異動。一番長いキャリアだった。その後、水道部署、外部出向を経験し、商工観光部署、スポーツ部署に配属された。しかし、ある出来事により健康部局に異動した。外部部局を経て退職。再任用職員として再びスポーツ部署に配属された。
	商工観光に入ったときに、上司から姉妹都市をやろうぜっていう話を突然出て、当時の関係管理職員がみんな呼び出されて、うちの町にとってメリットになる事業を考えてくれ、そういきなり言われました。みんな目を丸くして、次の打ち合わせ1週間後の打ち合わせまでにある程度固めてこいと言われたときに、集まった管理職10人ぐらい誰も書類を持ってこなかったんですね。企画書私だけ持ってっちゃったんですよ。直接相手の方と調整をしながら、やりましたのですごい大変でしたね。朝早く帰日も遅かったんですが物見遊山的なものは絶対やりたくないと思ったけど勉強になりましたね。
ホストタウンを始めた(担当となった)経緯	私が(スポーツ部署にいた)そのときに、当時はホストタウンという言葉は具体的には出てきませんでしたが、Y国から選手を迎え入れましょうという判断をしたのが私のときでした。(その後)オリンピックに協力しましょうかというお話があったので、私はこれは最高の機会だなと思ってそれでやりましょうという判断をしました。(再任用時)自分で蒔いた種を自分でちょっと育てたいよっていう思いで、オリパラの事業の方に関わるよって話したところ、正職員をサポートするポジションでいいですかって、それでもいいよってということで、それで主事という下の身分だったんですが、結局やはりみんな勝手もわからないし、なんていうんですかね、やる気も薄かったので、駄目だと思って、それからある程度ちょっと力を入れて進めてきたっていうのが、流れですね。
当初どのような思いを抱いたか	まずオリンピックで海外の選手を自分の町にもって、事前キャンプをやるっていう機会を国が求めたときに、即私は何か反応しちゃったんですよ。面白いじゃんってあれホストタウンっていう。その(かつて担当した海外)事業があって国際化といったところは自分の中に残っていたんじゃないかな。そのチャンスがまた来たぜっていうことだったのかもわかんない。もしかすると。
	不安はないですね、自信までじゃないんですが、私を理解してくれる人等はいるなと思ってたので、だからそれがやっぱり人だったんですよ。私の周りにいる人たちがいたんで、この人に話をすれば間違いなく形にしてくれるよねとか。それは自信はあったかな。
モチベーションは何か	やっぱ市民にとってもホストタウン事業に参加するっていうあの機会を作らなくちゃいけないと思ったから。子供たちの視野をね、広げたいと思ったし、子供たちにもっと世界を知ると同時に向こう、相手国の子供たちも日本の子供たちってどんな勉強してんだろうねどんな生活してんだろうねっていうのを理解してほしい
	人間的にもすごく好奇心が強いんじゃないですかね。いろんなことにチャレンジするのが嫌いじゃないのでわりと失敗も多いんですが、なんかいろんなことにトライするっていうのは遊びもそうなんですが、好きですね。
	いろいろな交流事業とか、いろいろイベントもそうなんですが継続を成し遂げたいっていうのはあった
庁内の反応	まだそこまで議論してないじゃんとか、比較的消極的な意見もありましたね。相当上の方から余計なことをやらなくてもいいんだよねっていうのを大きい会議の中で言われたことがありましたね。
	本当今でもよく言われるんですが、段階も踏みませんでした。段階を踏むと結論が出ないまま終わっちゃうんで、もう直接(学校の)先生に交渉して、並行して同時に教育長に相談しちゃうとか、そういう非常に新手の方法で取ってましたね当時。もう本当はそれは駄目だと思うんですが
	どこの役所も同じとは言えないんですが比較的役所ってね、その事業をやるための目的とか考え方とかそこに時間を非常に費やしちゃうって、戦略的なところを一生懸命考えるんですが、具体的なやるべき事業ってどういう形で誰がやるっていうのはあまりそこまで強く広く考えないんです。
	やっぱり役所っていうものものは、ルールに基づいて段階を経てっていう部分はそれは基本ではあるんですが、それをやっぱりそこだけで収めようとするややはりその先が生まれません。ある程度やはりその殻を少しでも飛び出すときも必要だと思うし、あとはどうしても役所で世間体とか周りの目を気にするものが多いんですが、それを基にしたからおそらくその先には行けない。本当の目的を達成することはできない
何のためにやるんだっていうのは、私達は市民の誰に何を体験させたいっていう、そこを一生懸命考えると役所の中では壁にぶつかりますので壁を破らなくちゃいけない一方、ちょっと足を踏み出しながらやらないとその目標は到達しにくいんじゃないかな	
おもしろい首長だったいろんなところに積極的に関わってっていくと思うんですよ。例えばうちの自治体なんかもそのうちの一つかもわかんない現在は。	
その他	何かが作った物よりも自分で何か登りたい山だったら違うルートがあるじゃんっていう。そんな感じかもわかんないですね。

出所：筆者作成

4.2.6 F（50代、室長、関東、相手国：アフリカ）

(1) ホストタウンの主な取組

相手国のメダリストによる市内中学生を対象とした陸上教室の開催、スポーツ国際交流員（SEA）の招聘、相手国への中学生派遣、などを行った。

(2) インタビュー分析

インタビュー結果は表4-6に記載した。

Fは、高校から陸上競技を始め、さらに練習に励むために、より良いコーチがいる関東の大学に進学した。その成果もあって、オリンピック出場資格を得るための標準記録の達成に、あと少しまで迫ったが、重要な大会でけがをしてしまった。大会本番に強いと感じていたFは、このアクシデントにより競技人生がピークアウトしたと感じたと発言している。

就職は知人の勧めにより自治体に決めた。庁内のキャリアは、当初スポーツ部署に配属され、その後、税務、福祉、保健部署を経験した後、再びスポーツ部署に異動した。

ホストタウンを始めたきっかけは、オリンピック選手と市民が身近に交流することができるのではという漠然とした思いがあって可能性を探ったことだった。特に子供たちへの教育効果が高いと感じたが、競技力の向上などすぐ効果が現れるわけでないので、本当に効果が上がっているのかどうか、毎回手探りの状況だった。市幹部も疑問に思いながらも、理解はしてくれていたと思っているとの発言があった。

相手国との交流も、何をすればよいのかわからず戸惑った。Fは大学時代の夢だったが、かなわなかったオリンピック出場と2020年東京大会を重ね合わせ、ホストタウンに関わることは使命だと感じた。

役所の仕事は基本的に条例等に定められた事項や、計画として決まっている事業を進めていく。このため、政策的に裁量のある仕事を行えるチャンスは少ない。しかしホストタウンの業務については、市長のチャレンジ精神に背中を押され、様々な取組ができた。庁内でも良い機会ととらえ、やれることはやろうという雰囲気があったので、後ろ向きなことを言われたことはない。

ホストタウンの担当を終えて、自信を持って後輩の指導にあたれるようになったと感じている。

表 4-6 F のインタビュー結果

<p>生い立ち・ 学生時代</p>	<p>陸上がすごい強い学校でしたし、そこに入ればその当時のコーチは、ベルリンオリンピックの走り幅跳びの日本代表という、実際その先生に教えてもらってすごい感覚的なところをすごく教えてもらったというか、同じように先生の言うことを感覚として感じる事ができたんで県内にしてできるものではなかったかなと。</p> <p>オリンピックに直結する大会は日本選手権なんですけども、標準記録でオリンピック標準まで2センチというところに迫って日本選手権の方で何とかクリアして、上位食い込もうというところですけども。</p> <p>1本目で、怪我をしてしまった。絶好調だったんです本当は。(いつもは)本番で結果が出た。やっぱり練習と違って試合というのは、火事場の馬鹿力じゃないですけどそういった力が出るんで、すごい体に負担だったんだとは思んですけどもそういったところで、怪我をしてしまって大体そこで競技人生もうピークは終わったなっていうところだったんです。</p>
<p>就職先</p>	<p>もう、道がもう決められちゃっていたんで。</p> <p>知り合いの方から役場の方に入れということで、そのまま入庁したという感じです。</p>
<p>庁内キャリア</p>	<p>採用後、教育委員会のスポーツ部署に配属された。その後、税務部署、福祉部署、保健部署を経験し、再びスポーツ部署に異動した。</p>
<p>ホストタウンを始めた(担当となった)経緯</p>	<p>やはりオリンピックは特にね、事前キャンプとか、事前にそういったものを誘致できれば本当に市民が身近で、相手国の選手関係者たちと接することはできるんじゃないかなっていうふうに漠然とは思ってました。そこがね相手国・地域がどこだっていうのはまだ当時はね、決まってもい wasn't したので、はい漠然とそういう感じでしたね。</p>
<p>当初どのような思いを抱いたか</p>	<p>基本的には私も含め市の場合は、子供たちに何かを感じてもらって、子供たちが将来、その感じたことを生かしていくような取組というところを一番メインに考えていました。子供たちの将来の10年先に20年先に効果がどうだったのかというところは、出てくるんじゃないかな。ていうふうに漠然との頃も持ってましたね。</p> <p>戸惑いましたよね。どこをどこをやればいいんだと。相手国として何を考えればいいんだというところがありました正直。</p> <p>本当に効果があるのだろうか。例えばもう毎回です。毎回効果があるかどうかは、もうその場ではわかりませんし。子供たちがその後どういふような気持ちの変化だったり、例えば競技力が上がったとかそういったところも、もうすぐには見えないので多分それは誰も私もそうですけれども、市長初め上の方でも、そこは疑問には思ってたと思うんですけど、ただそこも理解はしてくれたなとは思っています。</p>
<p>モチベーションは何か</p>	<p>私もオリンピックを目標に競技人生歩んだんですけども叶わず、というところでこの2回目の東京オリンピックの開催が決まって、そこにこういったホストタウンという形で関われるっていうことが私の使命なのかな、回ってきたんだな。自分じゃオリンピックでなかったけれども、オリンピックと関わる機会が来たんだというところですごく楽しみでした</p>
<p>庁内の反応</p>	<p>役所の仕事って基本的に法に則ってやる仕事なんです。法とかね、条例に従って。政策的な仕事というのはなかなかある部署に行かないとできないんですけども、今回ね、何でもチャレンジ、特に市長がね、何でもチャレンジしたらいいんじゃないっていう気持ちがあったと思うので、そこでバカになれたんじゃないかなっていう気はしますね。</p> <p>ただスポーツ部局の場合は、例えばうちの方の事業で言えば、(ルーチ的な決まった事業)っていうのはあるんですけども、次何やろう、新しく何やろうっていうのはなかなか今まで長年やってきて、多分ね歴代の方向ができるかなっていうのも考えたと思うんですけど、なかなかできることってもちろんお金もかかりますし、なかなかできないと思うんですけども、今回のそのホストタウンは、そういったところを抜きにしても、もちろんお金もかかるんで、ね、予算とるのは本来難しいんですけども、そこを市長をはじめ上の方がこの機会だからやってみようということの後押ししてくれたというところは大きかったと思ってます</p> <p>庁内では、そこは逆にいやオリンピックを契機にできることはやった方がいいんじゃないかというようなところで、特に後ろ向きなことを言われたことは、一度もなかった。</p>
<p>その他</p>	<p>ちょっと自信は持てるようになったかなって気はしますね。自信を持って、今部下がいっぱいいるんで、気がついたことだったりちょっとこれおかしいよっていうところは自信持って、ただちゃんと調べますけれども、自信もって後輩にはこここうしたらいいんじゃないっていうのは言えるようになったような気がします。</p>

出所：筆者作成

4.2.7 G (50代、課長、北陸、相手国：ヨーロッパ)

(1) ホストタウンの主な取組

相手国関係者の訪問(2018、2019年：高校生・パラ選手への技術指導)、相手国選手団へ小学生が絵はがきを送付、相手国オリンピック・パラリンピック選手団の事前合宿受入れ、などを行った。

(2) インタビュー分析

インタビュー結果は表4-7に記載した。

Fは、将来教員になるというルールがすでに敷かれており、進学する大学も決まっていた。しかし、大学在学中に交通事故に遭い、教員への道を断念した。両親の進めで市役所を受け、合格したのでそのまま入庁した。

入庁後は、下水道部局に配属され、その後、複数部局を経て商工労働部署に配属された。同部局では、日常業務の他、新規事業を作ることが必須とされており、経験を積むことができた。その後、官房系部署を経てスポーツ部署に異動した。

ホストタウンをZ国と行うことはすでに決められており、ホストタウンを担当するよう強い指示があったため、とにかく進めないといけなというプレッシャーがあった。所属課の課員はそれぞれ担当する業務があるため、イレギュラーなホストタウン事業は何事も一人で進めなければならなかったが、事業が伸展していくと、他部局からの協力が得られるようになり、次第に事業に前向きに取り組めるようになっていった。

ホストタウンが子供たちの将来に役に立つのではないかという思いは自然と持っていた。また、単発の事業で終わらせるのではなく、2020年東京大会後も事業として継続されていくことを望んでいた。相手国のチームが出場権を得られるかどうか不明であり、相手国に行ってみたら何かわかるかもしれないと単身かつ自費で相手国に渡航した。同国駐在の日本国大使からはばか者が来たと思われたに違いないと感じたとの発言があった。

相手国の競技委員会との交渉を進める中で、予算の執行が間に合わないおそれがあるため、予算要求の結果を踏まえず事業を動かし始めた。今考えたら絶対やらないことだとの発言があった。

毎年同じことを繰り返す「金太郎飴」を作ることには不満があり、少しずつでもより良い事業となるよう変化を心がけている。そのような変化を嫌がる職員には指導を行っている。

表 4-7 G のインタビュー結果

生い立ち・学生時代	いやもうレールが引かれていて学校の先生になるためのレールを引かれてたもう行かないといけない。違う大学選ぶものならば何しにその大学に行くんだという言わんばかり。
就職先	私も別に何も勉強せずに、教員かっていうことでちょっとそのまま来て、交通事故に遭い、車いすの生活を送っていたときに市役所に入れと親から言われ、受けたら受かってしまい、教員ならなかったという。今から思うと、学校の先生まだ未練があってやりたかったなと思っております。
庁内キャリア	採用後は下水道部局に配属された。その後、建築部署、税務部署、商工労働部署を経験し、教育委員会で文化財関係を担当した。官房系部署に異動したのち、スポーツ部局に配属された。 1年間の事業スケジュールでは大体決まってるというのがどこの部署に行ってもそうでした。ただ一番最初に行った商工部署なんかは、新規事業を必ず作れと、予算、財政課に通らなくてもいいから考える、というのが必ずあってそういったところでちょっといろいろと鍛えられた部分もあるのかなと。
ホストタウンを始めた（担当となった）経緯	最初からZ国とやるというのは決まっていた。 Z国に行ったらそのときちょうどヨーロッパ選手権を開催していて、競技委員会の人1人だけ、あと全員いなかったけど我々のために1人だけ残ってくれて、そのときの言葉が私達はお金がある団体ではない。オリンピックに出ても、身の丈に合った行動をとりますということで、何かそういうなんちゅうかな慎ましいというか、そういう印象が日本に戻ってきて、ここでいこうという話になったのは覚えてます。
当初どのような思いを抱いたか	最初は結構受身で、とにかく進めなければならぬ、やらないといけないという感じですね。 これは私がどう繋げたらいいんだろう。ていうのはね、全くZという国のこともわからないし。それはちょっと不安でした。何ができるだろうと思ってるだけで、全くわからない。情報としては、不安しかなかったですから。 事前期間は事前キャンプをしないとけないんだろうなと。でもそれ以前に、この事業はどういったところから、何をしなければいいんだろう全くわからない状況なので このホストタウンのこの仕事って人が携わることなので、やっぱソフト事業として、どんどん膨らむ大きくなることっていうのかな、そういうのは今までやったことがないですよ。スケールがどんどんどんどんやる携わる人の思いで大きくすることもできる。 大きくしたいというかZ国を知っていただきたい。まず知っていただきたいと思ってますっていう思いが一番強いですかね。
モチベーションは何か	特に話が出た子供ですね。やっぱりそういったところで何か交流とか、できるといいなというのはすごく最初からありました。 こういったことできないかっていう先々にはやっぱり子供たちは常についてくるんですね。頭の中で子供できるんじゃないか。それは常にあるので、特別何か自分が考えない考えそれをこうしないとけないとか、オプションとして必ず付けて考えるっていうんじゃないくて、自然にそれはついてきます。 何かできるといいなと最初に携わった人として、やっぱり終わらせるのは簡単ですけども何か続いていくといいなというのがあって、Z国っていうことになると、何か繋がるきっかけがないか、ちょっとしたことに繋がるというのが、あるんですねやっぱそういった部分。 これは我々がいくら事前キャンプの方準備をし、整えて最後には出場権を取っていただけないことには、これ成り立たないなということで、ヨーロッパの予選会ってのはあるというのがわかって、（競技委員会に）メールしたら「いいよ、チケットをあるよ」と。いやいやもうVIPルームから入って来いって言われてるんで行っちゃった。ゴールデンウィークあたりモヤモヤとしていてメールを何回かやり取りする中で、行ってみたらわからないかなと、行こうかなということを、向こうの通訳員さんとかとメールをしてる中で、来るんだしたら、大使館に連絡した方がいいよとかいろいろアドバイスが、そしたらまた、大使さんにはばか者が来たぞと言わんばかり。 ぜひやっぱり出場権を取って来ていただいたり、期待でそのときには描いていた市民との交流とかね、そんなことがうまくできたらなとそれはすごく思っていました。
庁内の反応	ただ私しかこの仕事をしてないっていう部分があったんです。正直なところ、スポーツ課の中でも、他の人ってというのは何かそれぞれの業務があって、この業務に携わってるのが自分だけで、次どうするんだっていうのを問われて、次ですか、予算も何も無いのに次。 大使さんを招いた。市長がこちらから伺った。そういったときにスポーツ部署ではなくて他部局が動いてくれる。そういった部分で自分以外の方が動いていただけた部分については少し今までと違ういう部分を感じる。 競技委員会と交渉しようということでそこから予算組みをし、ちょうど予算の時期だったので、何らかで競技委員会と交渉を勝手に始めて、予算つく前からもう勝手に始めてしまう。 今思うとよくやったなという。普通予算をつく前に次年度の事業を動かさないよなど。今から考えると絶対やらないことっすね。本当は思います。うまくいったからいいもんうまくいかなかったらどうしよう。チケットにしても航空チケットにしてもですね。
その他	金太郎船を作ってるのはどうも嫌いな状況なので、やっぱ少し来年は少し変えよう。その次も変えようってやっぱり少しずつ良くしていきたいっていう思いの中で仕事をしてるとどうしてもね、そういう変化を嫌がる職員に対してどうしても強めに言ってしまう。

出所：筆者作成

4.2.8 H (40代、主任、中国、相手国：中米)

(1) ホストタウンの主な取組

事前合宿の受入れ(2018、2019年)、PRグッズ・PR動画の製作(CATVで町内に放映)、相手国関係者への伝統楽器の寄贈、相手国オリンピック選手と小学生のオンライン交流、などを行った。

(2) インタビュー分析

インタビュー結果は表4-8に記載した。

Hは就職まで県内で過ごし、親族の勧めで地元の自治体に就職した。採用後、農林部署に配属され、その後、複数の部署を経て観光関係の県の外郭団体に出向した。そこで、町のキャラクター作りなどを企画した。そこでの経験を評価され、スポーツ部署でホストタウンの取組を担当することになった。

当初は、どのようなことができるのかという前向きな期待感と高揚感があった。どのようなことをやれば良いか不明であったが、逆に自由度が高く、自分で創り上げていく楽しさが勝った。

他方、相手国とのつながりをどのように持たせるかに悩んだ。ビジネスのつながりもなく、事前合宿を実施したという実績だけが残るのかと不安になった。政府の要綱も形式的な文言が並んでいるのみで、町にとってどのような利益が創出できるのか、自分で形作っていかねばならなかった。突き詰めて考えた結果、教育効果しかないと確信した。様々な主体と交流のつながりを拡大していったが、それが結果を伴っていたかは不明であり、ひょっとしたら自己満足かもしれないとの発言があった。

自ら挑戦する姿勢を大事にする理由は、子どもたちが自らの希望と可能性を信じられるように、大人こそが挑戦する姿勢を見せることが何より大切であると考えているためである。

日頃の業務は、自己のアイデアを取り入れる余地はほとんどない。しかしそのような現状を嘆いているのではなく、惰性の継続を改め、やり方を変更したり内容の見直しを行えば新しいアイデアを行う余地は生まれてくると確信している。

首長を始め庁内はホストタウンに理解があったと思っている。

表 4-8 H のインタビュー結果

生い立ち・学生時代	大学まで一貫して県内で過ごした。
就職先	就職した自治体は母方の里で、祖母に勧められて就職しました。当時は大きなモチベーションもなく、公務員で安定しているといった理由が大きなものでした。
庁内キャリア	採用後、農林部署に配属された。その後、健康福祉部署、教育委員会を経験し、県の外郭団体に転出した。官房系部署でシステム担当を経てスポーツ部署に異動した。
ホストタウンを始めた（担当となった）経緯	相手国はすでに決まっている状態だった。 いざやってみていくというんですけど、なかなかどうやっていいかっていう部分も町でわからなかったところもあって、僕結構観光でいろんな面白いこと、それこそキャラクターを作ったのは僕はやらしてもらいましたし、その辺のところを買われたのかなっていう、勝手に自分が気がしてるんですけど（Hさんを）名指してしたね。
当初どのような思いを抱いたか	気持的には実はわくわくしました。嬉しかったのは覚えてますね。 やっぱり何か、楽しそうじゃないすかホストタウンっていう響きで楽しそうだし、僕やっぱスポーツが好きなのでスポーツの関係の仕事もしたかったですし、やっぱり何か本当にそのときはね東京オリンピックに向かってってコロナもないときですから、本当にわくわくしているんなことがどんなことができるんだろう、どんな街ができるだろう。外国の方とねやっぱり交流をしていけるので楽しみでしたね。楽しいのがすごく多かった。 どうやって（相手国との）繋がりを持たせたいかっていうところがすごく悩みましたし、事前合宿はやったんだけど、もしかしたらそれってたったこれだけっていう評価なのかもしれないって今でも思ってます。ですけど来られるんだったらもうできる限りの交流はしようって思って、いろんな繋がれるいろんな人には繋げていくことはしましたけれども、それが結果を伴ったならそれはもしかしらたら、できたとは僕は思うんですけど自己満足に過ぎない部分かなとは思ってます。 （政府の説明は）ピンとこない。要するに綺麗な言葉が並んでるっていうとこなんですけど、これって町にとって何の実際何の役に立つんだろうってのはすごく悩みましたよね。それを実際僕らは形にしなきゃいけないわけじゃないですか。 だからそこはすごく悩んで、ビジネス的な繋がりがそもそもあるわけではない。だとしたら、もう本当に教育的効果しかないんじゃないかっていうふうにして、子供たちとの交流っていうのを結びつけようっていうことにはしましたね主眼を置いて。
モチベーションは何か	なんなんでもありました当然。もちろんなんなんでもありましたけど、何かわからないものをやるっていうのがなんか楽しいじゃないですか。でも思うんです僕自身はねなんか新しいことをするってすごく楽しかくなっているわかんないことをやる。 逆に何でもできる、自分で作っていくことができるじゃないですか。本当1から作れることで自由度が高いなと思って、やっぱり決められたことをやるっていうのは、あまり僕好きじゃないので、新しいことをやりたいなっていうのは、そもそもありました。 結構挑戦することとか相手の気持ちを尊重することとかっていうのは口では言うんですけど、簡単に教えるんですけど、それやってる大人って、結構僕の見る範囲では少ないんですよ。でもそれは現実には違うよとかいう話が結構言うじゃないですか大人って。僕らは子供のね、そういうことを言うなら、大人の自分がそういう挑戦をして、やっぱ実践しないとって言うことが意味なくなるんで、やっぱり自分がやることっていうことが次に繋がる子供たちにとって大人の責任とすれば、そうだし今の子供たちにも育てることに必要な説得力を持って話せることもあるので、まずは自分が挑戦して、よくね世界が変わるとかっていうじゃないですか。そこまで大きいものじゃないかもしれないんですけど、ちょっとした自分のその行動が本当にそういう世界を変えられるかぐらいのところを言ってくれればいいし、そういうことぐらいまでできるよっていうのを、何か子供たちに自分の子供をにフォーカスすれば熱く伝えていきたいかな （自分のアイデアを挟む余地は）ないと思いますなかなかないと思います。でもそれはやっぱり僕は思うんですけど、そこを嘆いててもしょうがないので、だったらどうできるかっていうところは考えるべきだと思うんですけど、常時（ルーチンワークが）刻んでますけど一緒にやるんですけど、これやるべきことっていうのを本当に考えてやるべきことで理由があるのはやらなきゃいけないし、それをやっておかつそのそのもの本当に今何か惰性的にやってるけれども、それって今役に本当に立ってるのかっていうところをやっばりもう一つ考えてやり方を変えて仕組みを変えていけば、だんだんその意味あるものに変わっていくと思うんですよ。意味がないから羅列してるなんかルーティンワークに見えるわけで、これ何でやるんだらうみたいなのやなくていいだろうみたいなことがすごくあるんですけど、やっぱそれはしっかり考えて前年踏襲じゃなくて変えていく。でもそれにはやっぱりあるっていうことはやっぱりある理由もあるのでそこはしっかり考えていかなきゃならないとは思いますが、工夫次第でやっぱり自分の裁量の部分っていうのを、スペースを空けていってですねそこに新しいアイデアを組み込めばいいかなっていうふう思う。
庁内の反応	（町長は）こういうこと超好きですね。好きですけどなかなかもう結構コロナがあったりしたときにはもうちょっとそこまでなくていいんじゃないみたいな話は、実際はあったような気がします。 （庁内の）理解があったんだと思います。やっぱり担当として見ればもっともっとやりましょうってすごく思いはありましたけど、でもやめろとって言う上から、がんって言うのはなかったですし、うまく回してくれたんじゃないかなって思う。
その他	やっぱりもちろんお願いはするんですよ。お願いをするんですけどもう雰囲気をやっばり楽しんでやりましょうとか、こういう選手が来るんでお願いばかりじゃなくて、やっぱり楽しくとにか一緒にやりましょうっていう気持ちでお伝えをしました。僕ができることはこまごまもちろんするんで、一緒にやりましょうっていう言い方をしたら学校にも負担感がないじゃないですか。なんかちょっとこれ楽しいことがやれるんじゃないかみたいなところを持ってもらったらしめたもんだと思って、逆にそれをやらなきゃいけないのが僕らの仕事かなっていうのはあるんです。常に考えてました。

出所：筆者作成

4.2.9 I (50代、主査、九州)

(1) ホストタウンの主な取組

県内自治体のサポート、県主催の関連イベントの企画・推進、などを行った。

(2) インタビュー分析

インタビュー結果は表4-9に記載した。

Iは、自活経験などの希望をかなえるため、県外の大学に進学した。教員を目指した理由は、先生と生徒が一緒になって学校を創り上げるという過去の経験に由来する。

大学時代に目にした1枚の発展途上国支援ポスターに触発され、海外勤務するチャンスを探っていた。日本の教育の姿が正しい方向に進んでいるのか、外から見つめ直したいと感じており、また、生徒に対して世界での活躍を求めるが、その経験を自分がしていないこともあり、JICAが主催する青年海外協力隊に応募し、海外勤務の夢を果たした。

その海外での経験が評価され、県庁でホストタウンを担当することになった。自身も海外での経験を活かすチャンスと期待感が大きかった。部署では、2020年東京大会を契機に、地域の活性化につなげたいという思いが言語化されている状況だった。

基礎自治体をサポートする立場として、手柄を主張する気は全くなく、地域の人が笑顔になること、また、県のサポートを基に、自治体が自立して取組を進めていくことに面白みを感じた。

交流のあり方に悩んでいたが、上司の一言により突破口が開けた。部署をあげての組織的な取組により、予算取りや幹部への説明は苦労しながらも乗り切ることができた。しかし、県庁内の他部署は、他人事という雰囲気が蔓延しており、また、従来の自分たちの仕事以外には関与したくないという、いわゆる縦割りの弊害により、自由な取組が可能なホストタウンの長所がうまく生かせなかったと感じている。各部署と自分の部署の温度差を解消するために副知事による会議を何度も開催したが、溝は埋まることはなかった。スポーツ部署単体で動いていても、人数や専門性の観点で限界がある。意識共有の難しさを感じた。

表 4-9 I のインタビュー結果

生い立ち・学生時代	(県外に進学した理由) 一つは恩師のすすめで恩師が大学のOBであったこと、二つ目は県外に出て、自分で生活してみたかったということで三つ目は、進学先の教育学部はかなり県でも高校の教員をですぬ輩出してますので、そういった情報もあったので近道と思って受験しました。
就職先	教員を目指したのはですね、私の母校が新設校だったんで、私1回生なんですけれども、かなり厳しい1回生で厳しい状態育てられてですね、最初はその学校に対してすごく批判的だったんですけども、やはりその中で先生と生徒と一緒に学校を作り上げていくってことにやっぱ面白みを感じて、教員を目指したいと思いましたし、あとは、私自身やっぱ学校っていうのは人生を変えるチャンスっていうかですねそういう出会いとか触れ合う場でもあるので、これはやっぱ大きな仕事になるなと思ってチャレンジしました。
庁内キャリア	採用後、県内高校に配属され、その後も各高校に異動した。JICAの青年海外協力隊を経験後、県庁スポーツ部署に異動した。
ホストタウンを始めた(担当となった)経緯	ホストタウンの取組については、その前に県独自でやろうとしてたのは、もうせっかくそういったもう国際大会、東京2020がもうやってくる、次来るのがもう何十年後になるかわからないっていうときに、これをただ観戦するだけではなくて、東京で起きていることを、いかに地域に持ち帰って周りの皆さんが盛り上がっていきけるようなそういう起爆剤にできないかっていうのがすごく私が赴任したときにも言葉として出てきてる時期でした。
当初どのような思いを抱いたか	自分自身がJICAで海外行ったりとか、そんなこともあったので、それに近いことがラグビーワールドカップと東京2020で国際交流ができる場面、しかもスポーツを通じてできる場面ってなったときには、何か私も絡んでできるんじゃないかっていうそのわくわく感っていうか、期待が大きかったですね。
モチベーションは何か	地域交流なんですけど、国際交流っていうよりも、もう単純な言葉で言うと、地域の人たちが笑顔になるから。今までなかった刺激がその地域に行って、そこでいろんな笑顔がたくさんできるので、みんなが優しい温かい気持ち日本人ってどうしても応援する文化ってたくさんあると思うんですね。確かにトップアスリートの応援もあるけども、そういうマラソンランナーの最後みんな拍手で送るようなそういう文化もあると思ってなんかそういう支援が見られたのは大きかったですね。それが我々県の手を離れてしまって(県内自治体で)勝手に少しずつ動き出したっていうのが面白かったですね。 自分の手柄を立てたいは全然僕にはなくて、絡んで一緒にやった人たちが成功していく姿を見るのがすごく私の喜びだったので、それが一つだけではなくて、二つ三つで起きていくとさらにさらに楽しかったですね。 バレーボールの国際大会誘致はしてですね開いてたんですけども、ただバレー国際大会が来て、そこにエスコートキッズということで小学生と一緒に提出入ってきて、それでおしまいチケットたくさん売らなきゃっていう話になってたのでこれって勿体ないよなっていうのはずっと思っていてですね、もっともっとこれ交流できるよねっていうのが、ラグビーワールドカップホストタウン2020できたので、その対する期待感ですね。いや、やっぱりそれはもう大変。しんどい思いをしましたけども。
庁内の反応	私とその交流に悩んでるときに局長が言ってたのが、お前は教員なんだから、生徒に尽くしたように、その対象が地域住民変わるだけなんだよっていうふうに言われて、難しく考えなくていいんだと。だから生徒がハッピーになればいいしそういうことであれば地域住民がハッピーになればいいのでハッピーになるって何だろうから始めていって、うん。一緒に作った感がありますね。やっぱ予算関係はきつかったですね。今のかなりそこを予算組み作るころはきつかったことはありますが、基本知事も応援、議会も応援してくれてたのでそのために我々の上司が走り回ってやってくれてたので 県庁内の話でいけば苦労はそうですね。やっぱり我々のスタンスとして東京2020を契機としてとかですね、もっと面白いことしましょう、使ってくれよって感じだったんですけども、なかなかそうはならなかったですね。もうそれ以外に、まずはいやいや、東京でやることでしょっていうのと関係ないでしょうと。それから、元々自分たちがやるべきことがあるので、それ以上はしないっていう発想の方が大きかったですね。 そのためにとにかく汗かいて、次長会をですね、ちょっと定期的にやるようにしたんですね。副知事がトップのそういうプロジェクトチームを作ってやったんですけども、それでもなかなか動かなかったですね。その会議を何度も開いてやりましたけど、会議が一番つらかったですねその場にいるのが、今のこの温度差はっていうですね。 縦割りの良さもあるんですけどもね。その枠やっぱ越えていかないし、どうしてもマンパワー的に言ってしまうと限界がやっぱあるので。例えば商工にですねちょっと話をしに行くとかはよくあったんですけども、例えばMOUのときの記念日については、どこどこ名産にしましょうとかいうようなですねそういったこともできるんですけども。もっと大きな取り組み、うん。これを契機にアンテナショップを立てましょうよ、そんな発想にはスポーツ関係がやっているとやっぱならなかったんですね。この辺の意識共有っていうか本当に深いところでの共感といいますか、難しいですね。
その他	漠然と大学時代に見た1枚のポスターですね。よくあるアフリカで井戸を掘ってるようなおっさんを見てなんだこれから始めて、いつかは行ってみたい…だったんですけども、それが学校で働くこと果たしてこの中に日本の教育って、これで本当に正しい方向へ進んでるのかなとかですね。一度外から日本の教育を見てみたいっていうふうになんか感じてですね、(青年海外協力隊に)チャレンジをしました。 あんまり長く同じ場所にいるということ、その自分自身のもう視野がやはり狭くなってしまっているので、これは変えるべきだなんてことでどうせ変わるなら、世界に出てやれと。格好つけてますけど一番大きいのは、学校の教員がその生徒にですね夢を語れとか、もっと世界に出てって言うんですけども、だったら、やはり自分がまず見て、やっぱ経験したことっていうのを伝えられるようになりたいなっていうのもありました。

出所：筆者作成

4.2.10 J (50代、課長、九州、相手国：太平洋)

(1) ホストタウンの主な取組

オリンピック選手団の事前合宿の受入れ(2018(2回)、2019、2020年)、パラリンピック選手候補団の事前合宿(2019年)、事前合宿受入れ選手団と住民の交流、などを行った。

(2) インタビュー分析

インタビュー結果は表4-10に記載した。

Jは、県内の大学に進学し、4年間スポーツに打ち込んだ。卒業後、民間企業に就職したが、スポーツに携わりたいという思いは強く、公務員試験に向けた勉強を続け、町役場に再就職した。

採用後の配属は教育委員会で、スポーツ行政を担当した。以降、教育委員会と産業部署の間を行き来する異動を繰り返した。

ホストタウンは、2020年東京大会と町を結びつける有力なツールであり、町の人に2020年東京大会の雰囲気味わってもらえる絶好の機会であると感じた。しかし、小規模な行政体であり、職員数、予算規模、海外交流の未経験さから、実現するには相当ハードルが高いことは理解していた。そのような中、県から事前合宿先を探している国の紹介を受け、本格的に検討を開始した。未経験な新しい事業のため不確実性が高いが、何もしなければ終わるという思いで実現に向けて動いた。

高校生の時に経験した米国でのレスリング交流は、言葉がわからなくてもコミュニケーションが成立することの衝撃をJにもたらした。この経験から、ホストタウンの取組においても、子供たちに各国のスポーツ事情をその国の人から聞いて知ってほしいという思いがあった。また、今後の交流の形態が、必ずしもスポーツ交流とはならなかったとしても、ホストタウンの取組からすべてが始まったということが、町の価値を向上させ、住民に自尊心を持ってもらう契機になると考えていた。

膨らむ予算に対する議会からの質問も様々に出た。議員にも交流の招待状を出し、とにかく見てもらって、一緒に交流すれば、必ず意義が理解できるので、反対の人はいなくなるという信念があった。

行政の縦割りはホストタウンの可能性を閉じてしまっていると感じている。部署の垣根を越えて得意分野で取り組めば、もっと様々なことができただろうと感じている。

表 4-10 Jのインタビュー結果

生い立ち・学生時代	大学の方は体育学部の方に入りまして、西日本東日本いろいろ推薦を来たんですけど、なんか3年間ですごい練習量が強かったんで西日本でっていうちょっと甘えもあったんで、東には行かずに西に行って西で勝てばいいじゃんと思ってるっていう気持ちもあって
就職先	何となくスポーツ関係したいなっていう頭がずっとあったんで、教員の免許持ってないんで、教育委員会とかスポーツの分野があるんで、地元のスポーツ環境でその仕事をしたいなっていうのがすごくありましたので、勉強全くしてなかったんで、今後試験も受けるのももう全く訳わからなくて営業行ったときにずっと公務員試験の勉強しながらして2年間民間企業行って、3年目に合併前の役場に入庁できてですね
庁内キャリア	30年近く行政経験のあるんですけどその中で教育委員会と産業しか行ったことない
ホストタウンを始めた(担当となった)経緯	でも東京だけはオリンピックやないしそういったのがあって、もう東京だけはオリンピックがないっていうのがそのときにずっと思ってた、この小さな町で、ちょっとそんな難しいなっていうのは行政職員なんで思ってたんですけど、でも実際に東京オリンピックで東京だけじゃないっていうのがすごく頭にあって、見に行ける人が多分64年から2020年の間ってやっぱりすごい空いてるじゃないですか。次来るの多分もういつかもわからないしそう考えると、東京に行って見に行く人ってテレビではいっぱいおるんですけど目の前で見るスポーツってそういうのを見る人って何人いるかっていうのを考えたんですよ。だから、実際この田舎から飛行機乗り継いで新幹線で行って東京まで行って、そのチケット買ってみる人ってあんまりいないなと思って、でもその東京オリンピックを肌感覚で感じてもらいたかったんですよ。
当初どのような思いを抱いたか	できるやろっていうのも思ってたけど単独でうちの町って交流とか海外の交流ってほとんどないですよ。でも絶対町の人をオリンピックの東京のオリンピックっていう感覚っていうか何か味わってもらいたいっていうか、なので、そのときに県の方から、県も同じ国と地域でっていう話があったんですよ。それからですよ本格的っていうかその思いはずっとあったんですけど、なかなかその相手もないし本当に繋がりもないんで。
モチベーションは何か	事前合宿を受け入れなかったら、他の国の地域のレスリング環境であったり生活環境であったりいろいろその国との差はある。のも当然ですけど、そういったところも知るっていうところはすごく知ってもらいたかったっていうのもやっぱりあるんですよ。その当時結構言ったのがそのね、もう子供たち今の時日本の子供たちはこういう環境やけど、こんなところちょっとどんでん行きたいよねとかってところは話はね、当時みんなと課の中でもしてました。 やっぱりどっかしらにありますね、なんかありますね子供であって地域の人って、やっぱり子供っていうのはやっぱりベースにありますね。 オリンピックとかキャンプとか俺がとか私がそのちっちゃいときに小学校のときに何かオリンピックの選手来たよとお世話になったねとかっていうのを他の町に行きますよね。俺の育った町っていう。そうやってやっぱり誇りに思ってもらいたいとか、好きでいてもらいたいんですよ。 調整も大変でしたけどやりがいものはものすごくありますよね。No.1ですよ。だからもうNo.1なんでいろんなものが繋がってほしいし、繋げていきたいなと思ってますし。だけどそれはオリパラ両方なんですよね共生社会もそうですし、もうそれで終わってしまったらなんかもう、なんか全然意味ないじゃないですか。だけどこれが始まったよねとかって5年後10年後20年後ですよ、まだ続いて、これって確かオリンピックなんかキャンプ地これから始まったよねとか共生社会もそうじゃないですか。 自分の中ではやっぱり考えてましたよ。体制整備とかその金とか予算とかっていうのはもう考えるけど、ただそこを天秤になっとったんか分かりませんよね。天秤にかけてそこのリスク部分と、こっちの得られるものを比べたときに、いや、結局今しないともう終わりじゃないですか。もう今しないも駄目だったんで
庁内の反応	うちもお金ちょっとかかりすぎるって説明したんですけど議会とかでもいろいろやっぱり出ましたよ。予算に対して事業に対してやっぱり出ますよね。その都度やっぱり説明して、議員とかも案内出すんですよ。一緒に交流見に来てくれるし見てもらったらやっぱりわかるんですよ。見ないとわかんないですよ。実際その目の前で見て選手頑張れみたら、これはやっぱりとかって思いますよ。ていうもういろんな人を見てもらって、やっぱりそこでね、いやもう反対の人は多分ないですよ。 最初何となく自分のその仕事の仕方って多分もうどうするどうするじゃなくて、こうしようと思うけどどうやろかっちゃうタイプなんですよ。だからみんなどうしようかでも大変やね、こんなことしたらもうしようと思うけども大変やしやっぱりやめとこうかみたいじゃないで、こうしようと思うけどどうやろかとかこんな、こんなあったらいいやんとか、ていうやり方なんですよ 個々(の取組)で終わるんじゃないで、もう教育委員会と産業課がやるやつをこっち側からつけて、お互いお互い設定でうちの課だけとか要はナワバリだけとか、もううちだけって言ったらもう全然もう終わってくるんですけども、それをつけていくっていうやっぱり行政がもう、やれば動き出せるんですけどそこまで得意分野だと思いますよ。
その他	(高校時代にレスリングの交流で初渡米した時)なんかもうなんかどっか連れてこれるもうなんかもう恐ろしくて一番最初です。めちゃくちゃでも本当もう単語ですよ。それでも通じたんでそれもすごくコミュニケーション取れるんですよもう言葉言語が違って、やっぱり人と人が一緒にいたら、すごく通じるものってやっぱり人間じゃないですか

出所：筆者作成

4.3 小括

本章 4.2 で実施した A から J までのインタビューの分析結果を以下のとおりまとめる。

4.3.1 ホストタウン担当以前の経験

ホストタウンの担当になるまでに、自己の信念を貫いた体験など、ポジティブな経験や心境を有する者は、A から J の全員であった。具体的には以下のとおりである。

A は、子供の頃通ったスポーツクラブのインストラクターに触発され、専門学校で社会体育を学ぶことを志すが、家庭の都合で断念した。しかし、一度就職して資金を貯め、自力で専門学校進学を果たした。

B は、雪原について他人の足跡を踏んでいけないタイプだと言い、新しいことへの挑戦を好む。このため、友人からは、常識から外れたところがあるという意味を持つ方言で呼ばれることもある。

C は、中学生の頃に、先生との交流の中で、成功したときの楽しさや面白さをイメージし、「やるしかない」と思えることを覚えた。

D は、田舎で一生過ごすことを嫌い、井の中の蛙で終わることを恐れ、関東の大学に進学した。大学生活の奔放さから、自らを「トリックスター」だと認識していた。

E は、商工観光部署の在籍時代、国際交流という経験したことのないテーマを半ば自発的に担当し、これまで感じたことのないやりがいを持って進めた。

F は、陸上競技の高みを目指すために強豪校に進学し、オリンピック日本代表資格を得る可能性があった。

G は、金太郎飴を作るのは嫌いという思いで、政策を少しずつ良くしていきたいと思っている。このため、変化を嫌う職員には指摘も辞さない。

H は、先例のないことへの挑戦は自由度が高いので楽しいと言う。町のキャラクター作成も成功させた。

I は、大学時代から関心があった海外へいつか行ってみたいと思っていた。働き始めて、一カ所に長くとどまると視野が狭くなることを危惧し、世界に出るために青年海外協力隊に応募した。

J は、高校時代に渡米した経験があり、英語の不自由さから当初は恐怖を覚えたが、言葉が通じなくてもコミュニケーションが取れるという成功体験を得た。

4.3.2 ホストタウンに何を感じたか

G 以外がホストタウンの取組に何かしらのポジティブな感情を見いだしていた。具体的には以下のとおりである。

A は、外国人のゲストに指摘された、オリンピックという絶好の機会になぜ何もしないのかという一言から、ホストタウンを利用した国際交流の機会を逃している自分に悔しさを覚えた。

B は、ホストタウンの取組をやらなければならないと確信し、これまでの公務員としての経験を振り返り、どうにかしてできるのではと直感した。

C は、X 国出張の際に、現地の関係者から何気なく聞いた交流の要望を思い出し、即座に X 国ならできると確信した。

D は、世界から寄せられた支援に対する感謝の表明と、震災と原発事故でマイナスになった東北のイメージの向上に利用しようと思った。同時に、それを自分以外に誰がやれるのかという自負心があった。

E は、かつて担当して志半ばで終わった事業を思い出し、再びチャンスが到来したと思った。

F は、過去に、けがでオリンピック出場資格取得のチャンスを逃した経験を踏まえ、再びオリンピックに関わることは与えられた「使命」だと感じた。

H は、これからの事業の可能性を想像し、なにか楽しいことができるに違いないと感じた。

I は、海外勤務の経験を活かし、なにか寄与できるのではないかと想像した。

J は、過疎化が進む小さな町が 2020 年東京大会を肌で感じられるチャンスだと思った。

4.3.3 ホストタウンの取組に感じた不安

A から J までの全員が、ホストタウンの取組を前に進めるにあたり不安を抱いていた。具体的には以下のとおりである。

A は、目的からすべて自分たちで決めていかなければならず、これまでの前例が通用しないことに不安を感じた。また、発展途上国との交流は庁内や市民の理解を得られないのではないかと心配した。

B は、多額の予算の確保や無名の市によるトップチームの合宿招致に成功確率の低さを感じ、失敗するなら普通はやらないし、自分もそうやってきた、と述べている。

C は、ホストタウンの取組を進めるために実施することのすべてに前例がなかったため、予算の獲得に憂慮した。

D は、ホストタウンという取組が具体性に欠けているため、具体的な目標を設定することができず、激しく悩んだ。

E は、行政がホストタウンを進めれば様々な手続きや調整で時間を要し、新しい試みが頓挫してしまうのではないかという不安があった。

F は、ホストタウンの取組として何をやればいいのかわからず戸惑った。また、取組の具体

的な効果が見えず、イベントのたびに効果を疑った。

G は、相手国の情報も不足する中で、事業として何をしていけばいいのか全くわからな
ず。不安しかなかった。しかし進めなければならないというプレッシャーを感じていた。

H は、政府のホストタウンの説明は美辞麗句が並んでいるだけで中身が無く、目的や目
標が理解できなかつた。町にとってどのような効果が望めるのか形にしなければならず、深
く悩んだ。

I は、他部署の消極的態度やセクショナリズムに悩まされた。打開するための全庁的な会
議体を設置するも、理解は進まなかつた。

J は、小規模自治体が、未経験の分野あり、かつ、人材も予算も限られている中で、本当
に事業ができるのかどうか悩んだ。

4.3.4 行政経験の活用や逸脱

A から J まで、これまでの公務員としてのキャリアで得た経験や、行政の仕組みを熟知し
ているからこそできる逸脱などを行っていた。具体的には以下のとおりである。

A は、これまで培ってきた地域内や庁内のつながりを活用し、予算がなくても実施できる
ような様々なアイデアを地域内で得ることができた。

B は、これまでの役所人生で得た経験や人脈をすべて投入した。

C は、X 国のパラリンピアン宿泊先が見つからないときに、以前の仕事のネットワーク
を活用し解決した。

D は問題となるポイントが予見できたため、事業を行うために必要な手続きに係する
部署を推定することができたとともに、協力を得るための説得に成功した。

E は、これまでの経験から、行政の手続きを実施すると結論が出ないまま終わってしまう
ことがわかっていたので省略していた。

F は、役所の中で政策的な仕事をするためには専門の部署に行かなければできないことを
知っていたが、ホストタウンを契機にチャレンジをした。

G は、相手国との交渉を優先して予算成立前に飛行機のチケットを手配するなど、予算
執行プロセスから逸脱した。

H は、経験上、新しいことを進めるためには命令形ではうまくいかないことを知ってい
たので、相手にお願ひし、一緒に考え、できるところはすべて自分で行った。

I は、地域との交流のあり方で悩んだが、上司から、先生の経験を活かせばよいとアドバ
イスをもらひ、これまでの経験を活かして取組を考えた。

J は、これまでの経験から「見てもらえばわかってもらえる」と確信しており、事前キャ
ンプに反対しそうな議会関係者も交流に招待し、理解を得た。

4.3.5 ホストタウンの効果

全員がホストタウンに何かしらの効果を感じていた。

Aは、ホストタウンがなにかしら子供の知見を広めるという効果があると考えた。

Bは、オリンピックの明るいイメージが地域の活性化に寄与すると考えた。

C、E、F、G、H、I、Jは、地域の子供たちや若い世代に貢献できるのではないかという思いを持った。また、Cは、「ボッチャ³⁰」が地域に根付いたことは結果として発生したことであり、当初から意識して進めたことではないと述べている。

Dは、震災当時に支援を受けた世界各国への御礼のメッセージの発信と復興を成し遂げつつある姿を世界に発信することに役立つと考えた。また、一緒に一度しかないオリンピック・パラリンピックを市民に感じてほしいと思った。

³⁰ 重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障がい者のためにヨーロッパで考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目のひとつ。一般社団法人ボッチャ協会 HP <https://www.japan-boccia.com/about/> 2025年1月23日確認

第5章 考察

本研究の問いは、ホストタウンの事例を用いて、冒険的な行動をすと思われなかった人々が地域づくりに貢献する「ばか者」に変容するプロセスを明らかにすることである。本章ではインタビュー対象者がどのような契機で「ばか者」に変容したのかを考察する。それにより、本研究における「ばか者」はどのような存在なのか明らかにする。

5.1 「ばか者」の特性を持つ者

第4章4.2で分析したとおり、インタビュー対象者は各自治体のホストタウンの取組の中心的役割を担い、成果を出している。シリング(2018)は、過去や現在の複数のイノベーター、特に統計的に外れ値に当たる少数の者を対象に比較分析し、イノベーターに共通する「並外れた」個性を探した。その結果、自分は他の人たちとは違うという孤独意識、自分ならできるという並外れた自信、壮大な問題に取り組む理想主義などの共通点を見いだせた。つまり、優れたイノベーターになる者には、何かしらの特性があったということである。なお、イノベーターの特性が先天的なものなのか、または後天的に学習等によって獲得されたものなのかについては、先天的な特性であることに否定的な先行研究が主流である。例えば、クリステンセン(2021:44)は、イノベーションに必要な能力の3分の2は後天的に取得可能だとしている³¹。

社会の中の「ばか者」であるイノベーター(第2章2.1.1(1)参照)に特性があるとすれば、本研究における「ばか者」にも何かしらの特性が見いだせるのではないか。シリング(2018:17)はイノベーターたちのインタビューや自伝といった当人たちの語りを収集・分析し、特性を検出している。同様に、インタビュー対象者の語りの中にも、何かしらの「ばか者」としての兆候を見いだすことができるのではないか。第4章4.3.1では、それぞれ日常やこれまでの人生とは異なった環境や人との接触、あるいは困難な目標の達成によって、自己が持っていた限界や常識を超越して、それまで有していなかった新しい価値観を獲得するという体験をしている。これはインタビュー対象者が「ばか者」としての特性を有していることをうかがわせるような行動や言説であると言える。これを踏まえ、インタビュー対象者は、インタビュー対象者は「『ばか者』の特性を持つ者」とする。

5.2 行政組織の一員としての立場

インタビュー対象者は、全員自治体の職員としてホストタウンの取組を行った。西尾(2001:233-237)は、日本の行政官僚制は、法規万能主義に加え、内部規則に過度にこだ

³¹ 本研究の「ばか者」の特性が、先天的な素質であったのか、または、後天的に獲得した能力なのかについては、それを分析するためのデータが十分ではないので判断ができなかった。

わる依法主義、セクショナリズムと縄張り主義など「先例踏襲、旧套墨守の傾向が強く保守的」(西尾,2001:237)としている。また、宮入(2013:124)は、行政組織の年功序列の昇任制度は、規則遵守の考えを過度に助長し、失敗の恐れを強めることになると指摘する。さらに、意思決定の失敗が批判されやすく、試行錯誤は容認されにくくなり、無難な意思決定に偏りがちになる。結果として行政の事なかれ主義や前例踏襲主義に陥り、イノベーションが起きにくくなるとしている。

また、地方公務員の昇進について、人事・財務・企画といった自治体の政策形成の中枢を担う官房系部署経験者に昇任の優位性があるとされている(松尾,2021:65)。インタビュー対象者は、B、Gを除き、官房系部署の経験がなく、住民との接点が多い税務や健康福祉などの、いわゆる事業系部署で実務専門性を発揮している。自治体のあり方にかんする意思決定プロセスに携わり、高い人事評価を獲得することを狙い昇任を争う上昇志向の強い人材の観点からすれば、B、G以外のインタビュー対象者は組織の辺縁に位置する人材であると言える。

所属する自治体によって程度の差はあると推察されるが、インタビュー対象者は、上述のような行政組織のもつ組織文化や価値観に従って仕事をしている。

5.3 両義性と斜めからの目線

本章5.1および5.2で論じたように、全インタビュー対象者は異なる2つの目線からホストタウンを見ていた。1つめは、これまでの経験等で得られた開放的・ポジティブな目線である。2つめは、地方公務員として、行政組織が積み重ねてきた歴史や組織文化に立脚した現実的・抑制的な目線である。このように相反する概念が併存している状態、すなわち両義性を有する存在とは何か。一つの例として、赤坂(1992:18)は、共同体の内と外を行き来する「よそ者」は両義性を有すると指摘した。敷田(2009:84)は、赤坂の示した「よそ者」の両義性を「両義的な存在とは矛盾する2つの概念を包括できることであり、よそ者は異なる2つのことを理解できる存在である」と述べている。さらに、両義的な2つの立場を融合し、大きな成果を上げた例について、大澤(2023)は、ペシャワール会の中村哲(故人)³²に言及している。大澤(2023:402-421)は、中村が「よそ者」にもかかわらず、なぜ他国の支援機関と異なり現地で受け入れられ、現地の人々とともにアフガニスタンの復興のために大きな成果をあげることができたのかについて、両義性から導かれる「斜めから

³² 1946年福岡生まれ。九州大学医学部卒業。1984年にパキスタンでハンセン病の治療開始。その後、難民キャンプ等に活動範囲を拡大し、1991年にアフガニスタンに診療所を開設。2000年に大干ばつに遭遇し、医療だけでは人の命を救えないと、安全な水を得るため、日本伝統の治水技術を用いて広大な農地を回復させた。2019年までに1万6500ヘクタールを回復させた。同年、アフガニスタンで何者かに銃撃され死亡した。福岡市HP <https://www.city.fukuoka.lg.jp/shicho/hisho/shisei/009.html> 2025年1月23日確認

の目線」を用いて次のとおり説明している。

中村は、現地の人々と同じように悩み、苦しみを共有するなど徹底した現地主義を貫いた一方で、日本人の沽券や信義を意識し、現地の問題を解決するために日本の伝統技術を用いた。このことは、中村が現地の人であると同時に、日本から来た「よそ者」であるという両義性を有していたことを表している。他方、他国の支援団体は、自国ではすでに一般化している解決策を「教えてやる」という上からの目線で現地の指導にあたった。しかし、中村の目線は、共同体の構成員が交わす対等な視線で現地の人たちを見返す一方で、外部からの指導者然とした目線も併せ持っていた。中村は最初から現地の課題に対する答えを知っていたわけではない。自らも困難と対決し、現地の人々とともに答えを見つけようとした。これがアフガニスタンの人々にとって、中村は現地の人であると同時に農地を回復するために治水技術を指導する者であるという「斜めからの目線」を持っている者と認識された。他国の支援団体と中村の目線の差異が、中村の指導が現地で受け入れられた要因であるとしている（図5-1）。その結果、大澤（2023：415-416）は、中村に現地の人を動かすことができたと推察している。

この「斜めからの目線」とは、両義性を有する存在が持つAとBという目線について、Aから導き出される自明の前提をBが変容させ、A'という新たな目線を創出することである。

冒頭で述べたとおり、インタビュー対象者は、「『ばか者』の特性を持つ者」であると同時に「行政組織の一員」であり、心理的・立場的に両義性を有している。このインタビュー対象者の有する両義性が作用し、何かの変容を経て「斜めからの目線」を獲得し、地域づくりに成果をあげたのではないか。

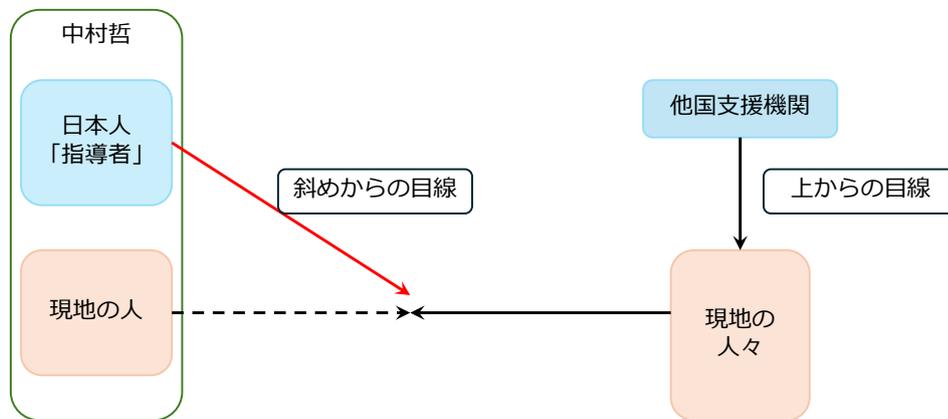


図 5-1 中村哲が有していた「斜めからの目線」

出所：大澤（2023：402-421）を基に筆者作成

5.4 「ばか者」への変容プロセス

5.4.1 両義性の表れ

ホストタウンの存在を知ったとき、インタビュー対象者は、第4章4.3.2のとおり、G以外は直感的に前向きな反応を示している。つまり、彼らは、ホストタウンの取組を直感的に「面白そう」「楽しそう」と感じ、積極的かつ主体的に「推進したい」とポジティブにとらえた。これは、各自に備わる「『ばか者』の特性」が、ホストタウンに様々な可能性を見いだしポジティブな反応を引き出したと言える。

しかし、第4章4.3.3のとおり、インタビュー対象者全員が同時に不安を感じている。これは、「行政組織の一員としての立場」から、インタビュー対象者自身もつ、不確実性が高く説明が困難な案件を忌諱する性質や、そもそも、そのような組織風土をもつ行政が新規性の高い試みを実行することへの危惧の表れと理解できる。実際、A、B、Eは庁内の意思決定のプロセスで、ホストタウンの推進を幹部に反対されている。

5.4.2 両義性の作用

「行政組織の一員としての立場」(A) (図5-2)の視点から見れば、ホストタウンは取組の内容が不透明で、多額の予算と労力がかかり、かつ効果がわかりにくく、積極的に取り組む価値はない。むしろ担当になることを避けようとしても不思議ではない。その理由は、「組織の常識」から導き出される想定結論を逸脱することは相当な困難をとまなうからである。この視座は、本章5.4.1で示したように、インタビュー対象者の「不安」として現れ、ホストタウンの取組が現実的に実行可能なのか、ホストタウンに可能性を感じている自分自身へ疑義を呈している。

しかし、インタビュー対象者にとって、「『ばか者』としての特性」を持つ者(B)として眺めるホストタウンは、大きな可能性を秘めた価値がある取組と映る。この目線が、行政組織が要求する常識に沿おうとする姿勢を変容させ、行政の常識から逸脱するという「斜めからの視線」(A')を獲得した(図5-2)。

この結果、ホストタウンを懐疑的に見つめる視線は、「どうすれば取組を進めることができるか」というこれまでの経験等を活かしてホストタウンの取組を進めようというポジティブな目線に変容した(第4章4.3.4)。

大澤(2023)は、中村哲の事例を分析し、「斜めからの目線」の存在と効果を解き明かした。それは、両義的な2つの矛盾した立場を持つ者を外部から観察した場合、ひとつの立場を見つめているつもりが、実際はもうひとつの立場が観察者を斜めから見つめ返していたという目線のずれであった。一方、本研究では、目線のずれを経験したのは、両義性を有する者である。自己の中のひとつの側面が放つ目線が、もうひとつの側面に干渉され歪められることにより、対象の見え方が異なってくる。このように、本研究によって「斜めからの目線」を発した側からの作用と効果が説明可能となった。

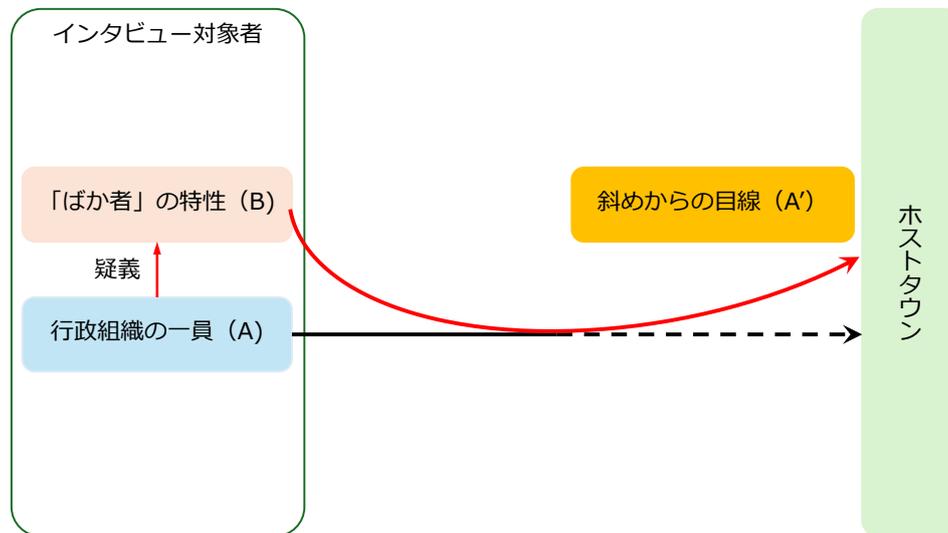


図 5-2 「斜めからの目線」の獲得プロセス

出所：筆者作成

5.5 「ばか者」への変容プロセスとはなにか

本研究で捉えることができた「ばか者」への変容プロセスとは、自己の中で矛盾するプラスとマイナスの両義性を抱えながら、プラスを用いてマイナスをプラスに変容させ、自分のもつ常識を超越することである（図 5-3）。また、本研究の「ばか者」とは、自己・社会・組織の常識に疑問を呈していく存在である。

ホストタウンに関わるに当たり、インタビュー対象者 10 人のうち 9 人は、「具体的な成果」のイメージを取組当初にもっていなかった（第 4 章 4.3.5）。さらに F は、イベントのたびに成果が出るかどうかわからなかったと述べている。H は、結果はひょっとしたら自己満足に過ぎないかもしれないと述べている。

これらのインタビュー対象者は、具体的な成果を当初から見込めておらず、むしろ、楽しそうだという「自分の感覚」に従い、何か社会のためになるだろうという程度の漠然としたものであった。この点は、西村（2014：4-5）が述べるソーシャル・イノベーターである、新たなアイデアと手法によって社会課題の解決や社会の関係を変える存在とは異なる。

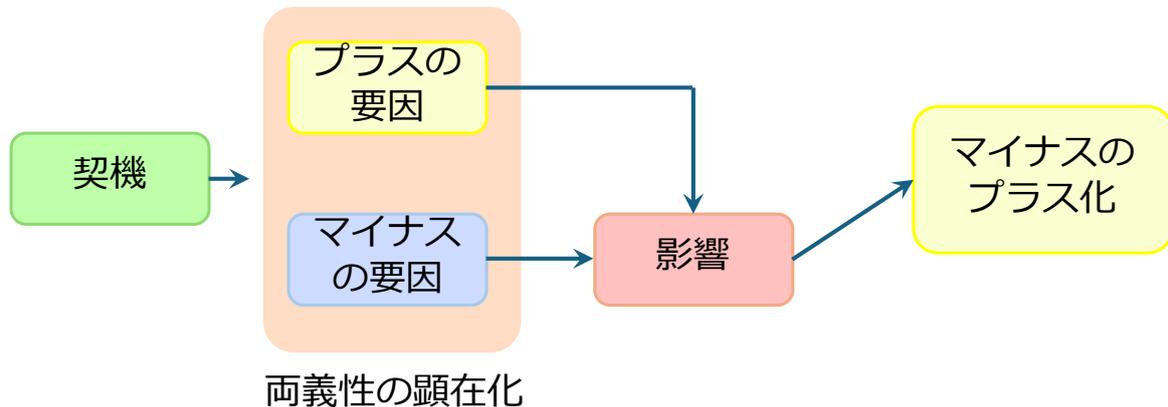


図 5-3 「ばか者」への変容プロセス

出所：筆者作成

5.6 結論

5.6.1 よそ者、ばか者、若者

第 1 章 1.1 で述べたとおり、一般に地域づくりに貢献するといわれている「よそ者、若者、ばか者」のうち、「ばか者」は、その存在が示唆されているのみで、どのような者なのか必ずしも明らかではなかった。

本研究では、ばかの語源と使われ方を調査し（第 4 章 4.1）、ばかの語源説の中には、「愚か」というネガティブな語意だけをもつという説だけではなく、並の人では行わない常識から逸脱した言動を行う者を意味する含意という説もあることを明らかにした。

さらに現代社会におけるばかの使われ方には、ポジティブな語意で使われているものもあることを確認し、現代社会ではイノベーションや地域づくりの現場において、社会や組織の常識を超越していく「ばか者」が存在することを明らかにした（第 2 章 2.1）。

加えて、ホストタウンという特殊な環境におかれた者が、地域づくりに貢献する「ばか者」に変容していくプロセスを「斜めからの目線」という概念を用いて明らかにした（第 5 章 5.4）。このように、先行研究では明らかにされていなかった地域づくりに貢献する「ばか者」の存在を確認し、その変容プロセスを明らかにしたことにより「よそ者、ばか者、若者」という存在の具体化に貢献できた。

5.6.2 現代の「ばか者」像

第 2 章 2.1.1(2)および 2.2.2 で論じたように、1990 年から 2000 年代初頭の地域づくりは、尖った才能を持ち、絶え間ない努力によって先導する一握りの者によって進められていた。この者は、地域内部の者から「ばか者」と呼ばれ、侮蔑のまなざしを受けたが、彼らは

持ち前の強い信念で地域づくりを進めた。この「ばか者」による地域づくりは、当然ながら英雄的なリーダーが不在の地域では発生しえないという限界がある。

本研究の調査対象である 10 人の「ばか者」のうち 8 人が組織の中核で活躍した経験がなく、組織の辺縁で特段目立つことなく過ごしてきた者である。本研究は、これまで地域づくりに積極的に関与した経験がないような者であっても、きっかけさえあれば本人も覚知していない力を発揮し、地域づくりに貢献できる可能性を示した。

5.6.3 愚行権

いわゆる「愚行権」を主張したミル（2020：125）は、『自由論』において、自分で責任を負う限り、他の人々から物理的・精神的制約を受けずに自己の意見に基づいて行動する自由があると主張した。ミル（2020：19-20, 78-79）は、人々にとって、自分たちに適用されているルールが普遍的に自明で正しいと思い込むことが習慣化しており、それが本性だと取り違えていると主張している。このため、本性に従い、自由に発想する者は異端として社会的非難などを受ける。そのような事態を避けるために、人々は大胆で積極的な独立した思考をしなくなるという。

本研究で取り上げた 10 人のインタビュー対象者は、本章 5.1 で述べたとおり、「ばか者」の特性をもつ者であった。しかし、社会や組織の中で、その特性が再び発揮されることはなかった。Bellwood（2006：2436）は、生物の中には、例外的な環境におかれた場合に特定の機能が覚醒する「休止機能群」（sleeping functional group）の存在を指摘している。この説を本研究に類推適用すれば、日常の業務の中に、ホストタウンという非日常的な要素が入り込んできたことで、インタビュー対象者を取り巻く環境が変化した。そのときにインタビュー対象者 10 名に生じた「斜めからの目線」は、彼らを精神的に解放し、その結果、彼らは「愚行権」を行使したとも言える。

5.7 本研究の限界と今後の展望

本研究では、2020 年東京大会を契機としたホストタウンの取組を事例に、「ばか者」への変容プロセスを明らかにした。本事例は、大規模スポーツ大会という特殊な環境の下、地方自治体が主体となって進められた取組である。このため、例えば民間企業など他の組織でも観察されるのか、その際、どのようなできごとが契機で「斜めからの目線」が発現するのか、また、地域づくりへの貢献以外にも、どのような効果を自己、他人または社会にもたらすのか、などについて、本研究では明らかにできてない。

また、「ばか者」のペルソナについて、本研究では 40 代以上の経験が深いベテランを事例としたため、若い世代でも「ばか者」は存在するのかどうか検証する必要がある。特に、

本研究ではベテランは経験を活かし、マイナスの目線をプラスへと変容させたが、若い世代が、主にアイデアと発想力を発揮し、自己や組織の常識を超越することができるかどうかは今後の研究が待たれる。

今後の展望として、「ばか者」の分析は心理学のアプローチも有効ではないか。例えば、パーソナリティの特性論によって「ばか者」のパーソナリティを量的に分析できる可能性がある。今後の研究に期待したい。

謝辞

本研究のインタビューにご協力いただいた10名の方には、多忙な折にもかかわらず、快く応じてくださいました。また、一般にはネガティブな語意を有する「ばか者」という言葉にも寛大なご理解を示してくださいました。各自治体における地域の関係者の方々、筆者の元上司にも、お時間をいただき有益なお話を伺うことができました。皆様にこの場を借りて厚く感謝いたします。

最後まで粘り強くご指導くださった敷田先生、多くのアドバイスを惜しみなくくださった敷田研究室の皆様にも改めて感謝いたします。

参考・引用文献

赤坂憲雄 (1992) 『異人論序説』, 筑摩書房, 335p.

海士町 (2018) 『ないものはない～離島からの挑戦～最後尾から最先端へ～』, 海士町 HP
http://www.town.ama.shimane.jp/contact/pdf/naimonohanai_h30.8.1.pdf 2024年12月28日確認

Åstebro, T. Braunerhjelm, P. and Broström, A. (2013) Does academic entrepreneurship pay?, *Industrial and Corporate Change*, 22(1), pp.281-311.

Bellwood, D. (2006) Sleeping Functional Group Drives Coral-Reef Recovery, *Current Biology*, 16, pp.2434-2439.

Buenstorf, G. Nielsen, K. and Timmermans, B. (2017) Steve Jobs or No Jobs? Entrepreneurial activity and performance among Danish college dropouts and graduates, *Small Business Economics*, pp.1-21.

クレイトン=クリステンセン・ジェフ=ダイアー・ハル=グレガーセン (2021) 『イノベーションのDNA (新版): 破壊的イノベーターの5つのスキル』, 翔泳社, 328p.

P=F=ドラッカー 『イノベーションと企業家精神』, 上田惇生訳, ダイヤモンド社, 324p.

ジョン=エルキントン・パメラ=ハーティガン (2008) 『クレイジーパワー: 社会起業家——新たな市場を切り拓く人々』, 関根智美訳, 英治出版, 325p.

リチャード=フロリダ (2013) 『クリエイティブ・クラスの世紀』(電子版), ダイヤモンド社, 388p.

デヴィッド=グレーバー (2020) 『ブルシット・ジョブ——クソどうでもいい仕事の理論』岩波書店, 426p.

生田幸士 (2019) 『世界初は「バカ」がつくる: 「バカ」の育ち方あります!』, さくら舎, 169p.

加藤久雄 (2015) 「長野市のオリンピック・パラリンピック教育」『スポーツ庁 オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議 (第3回) 配付資料』, 27p.

加藤崇 (2019) 『クレイジーで行こう!: ゲーグルとスタンフォードが認めた男、「水道管」に挑む』, 日経BP社, 287p.

木下淳史 (2022) 『異端のイノベーション』, 幻冬舎, 191p.

Martin, R. L. and Osberg, S. (2007) Social Entrepreneurship: The Case for Definition, *Stanford Social Innovation Review*, Spring, pp.29-39.

松本修 (1996) 『全国アホ・バカ分布考: はるかなる言葉の旅路』, 新潮文庫, 582p.

松尾孝一 (2021) 「地方公務員の中期キャリアの分析——政令指定都市 A 市の大卒行政事務系職員の異動・昇進の構造とその規定要因を中心に——」『経済論叢 (京都大学), 195(1), pp.47-67.

松橋崇史 (2017) 「メガスポーツイベントの関与自治体におけるソフトレガシーの形成要因——2002年日韓 FIFA W 杯の関与自治体を対象にして——」『笹川スポーツ研究助成研究成果報告書 2017年度』, pp.173-179.

J=S=ミル (2020) 『自由論』, 岩波書店, 298p.

- 宮口侗迪 (2007) 『新・地域を活かす』, 原書房, 214p.
- 宮入 (茨城) 小夜子 (2013) 「地方自治体の行政組織の特性と組織風土改革」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』, 14, pp.115-126.
- 三好規正 (2010) 「自治体職員の能力開発のための人事システムと地方公務員制度」『山梨学院大学法学論集』, 64, pp.1-46.
- Moran, J. M. Wig, G. S. Adams Jr., R. B. Janata, P. and Kelley, W. M. (2004) Neural correlates of humor detection and appreciation, *NeuroImage*, 21, pp. 1055-1060.
- 西原文乃 (2024) 「吉本興業：47 都道府県に広がる『あなたの街に住みますプロジェクト』」『一橋ビジネスレビュー』, 72(3), 東洋経済新報社, pp.134-146.
- 西村仁志 (2014) 『ソーシャル・イノベーションが拓く世界——身近な社会問題解決のためのトピックス 30』, 法律文化社, 222p.
- 西尾勝 (2001) 『行政学〔新版〕』, 有斐閣, 430p.
- 西尾隆 (2012) 「分権改革と地方公務員の今後のあり方」『都市とガバナンス』, 18, pp.1-9.
- 野中郁次郎・廣瀬文乃・平田透 (2014) 『実践ソーシャル・イノベーション：知を価値に変えたコミュニティ・企業・NPO』, 千倉書房, 356p.
- 小田切徳美 (2013) 「地域づくりと地域サポート人材——農山村における内発的発展論の具体化——」『農村計画学会誌』, 32(3), pp.384-387.
- 小田切徳美 (2018) 「地域づくりと地方自治体」『地方自治法施行 70 周年記念自治論文集』, pp.495-509.
- 大石尚子 (2020) 「『むら』のソーシャル・イノベーターたち——マルチチュード的企業家精神の醸成を展望して——」『社会科学研究年報』, 51, pp.146-159.
- 大澤真幸 (2023) 『資本主義の〈その先〉へ』, 筑摩書房, 413p.
- エベレット＝ロジャーズ (2007) 『イノベーションの普及』, 三藤利雄訳, 翔泳社, 530p
- 笹生心太以下 6 名 (2023) 『ホストタウンアーカイブ：スポーツまちづくりとメガイベントの記録』, 青弓社, 285p.
- シュムペーター (1977) 『経済発展の理論 (上) ——企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究』, 塩野谷祐一以下 2 名訳, 岩波書店, 362p.
- ヨーゼフ＝シュムペーター (2022) 『資本主義、社会主義、民主主義 I』, 大野一訳, 日経 BP 社, 511p.
- 新村出 (1995) 『語源をさぐる』, 講談社, 362p.
- メリッサ＝A＝シリング (2018) 『世界を動かすイノベーターの条件：非常識に発想し、実現できるのはなぜか?』, 染田谷茂訳, 日経 BP 社, 332p.
- 敷田麻実 (2009) 「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』, 9, pp.79-100.
- 敷田麻実・森重昌之・中村壯一郎 (2012) 「中間システムの役割を持つ地域プラットフォームの必

- 要性とその構造分析」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』, 14, pp. 23-42.
- 清水洋 (2019) 『野生化するイノベーション：日本経済「失われた20年」を超える』, 新潮社, 264p.
- 清水洋 (2022) 『アントレプレナーシップ』, 有斐閣, 361p.
- 高野誠鮮 (2015) 『ローマ法王に米を食べさせた男：過疎の村を救ったスーパー公務員は何をしたか?』, 講談社, 254p.
- イヴ＝アレクサンドル＝タルマン (2020) 「知性が高いバカ」『「バカ」の研究』, ジャン＝フランソワ＝マルミオン編, 田中裕子訳, 亜紀書房, 330p.
- 田中輝美 (2021) 『関係人口の社会学：人口減少時代の地域再生』, 大阪大学出版会, 385p.
- 戸梶亜紀彦 (2017) 「オフィス改革による公務員の職場における意識・行動の変化に関する検討－愛媛県西予市を事例として－」『現代社会研究』, 15, pp.41-48.
- レフ＝トルストイ (2000) 『イワンのばか』, 岩波書店, 322p.
- 植木久美・十和田朗・津々見崇 (2005) 「国際イベントを機とした市民の国際交流活動に関する実証的研究－広島アジア大会を事例として－」『都市計画論文集』, 40(3), pp.259-264.
- 山内道雄 (2007) 『離島発 生き残るための10の戦略』, NHK出版, 203p.
- 柳田国男 (1979) 『不幸なる芸術・笑の本願』, 岩波書店, 277p.
- 湯崎真梨子「こんなんしてます。：わだいのしごと 122」『わかやま新報』(2016年10月18日日刊6面 <https://www.wakayama-u.ac.jp/news-2024/2016101800065/> 2024年12月23日確認)